喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

—喜界島通信所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

城久遺跡群

山田中西遺跡Ⅰ

2006年3月
喜界町教育委員会

序　文

この報告書は，喜界島通信所整備事業に伴い，平成１５年度と平成１６年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。調査の結果は，古代から中世の遺構や遺物が出土しました。この遺跡は，平成１５年度に県営畑地帯総合整備事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施し，南西諸島で他にあまり例のない土坑墓が複数検出されたことで注目をされている遺跡でありました。

今回の発掘調査報告書によって，町民はもとより多くの方々が山田中西遺跡を理解していただくとともに，今後とも広く文化財の保護にご理解とご協力を賜れば幸いです。

最後に発掘調査に従事していただいた町民の方々をはじめ，発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた鹿児島県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センター，その他各関係機関の方々に対して，深く感謝の意を表します。

平成18年３月

喜界町教育委員会
教育長　晴永　清道

報告書抄録

ふりがな	やまだなかにしいせき
書名	山田中西遺跡
副書名	喜界島通信所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	8
編著者名	澄田直敏　野崎拓司
編集機関	喜界町教育委員会
所在地	〒891－6202　鹿児島県大島郡喜界町湾61
発行年月日	西暦２００６年　３月31日

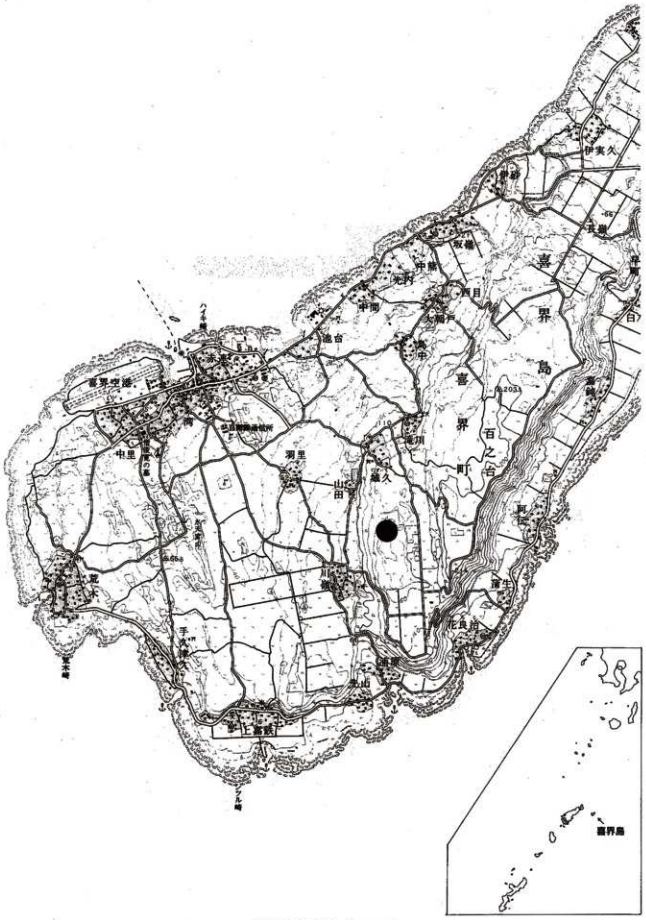
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
山田中西遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 きかいちょうだいがなりやまだ 喜界町大字山田 あざやまだなかにし 字山田中西	469251	90-77	28° 18′ 05″	129° 58′ 05″	2003.12.24 ～ 2003.12.25	確認・ 本調査 160	喜界島通信所整備事業
						2004.10.21 ～ 2004.12.02	本調査 500	
							計660	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山田中西遺跡	集落跡	古代・中世	掘立柱建物跡４棟 土坑墓３基 土坑５基 焼土跡２か所 柱穴列１条 柱穴250基	土師器（甕），須恵器，カムィヤキ，白磁，滑石製石鍋，滑石製品，刀子，鞘の羽口，鉄滓，粘土塊，台石，凹石，磨石，砥石，金床石，軽石製品	調査後の遺跡については消滅。

要約

喜界島通信所整備事業に伴い調査された当遺跡は，海岸段丘上に営まれた古代～中世の集落跡である。集落跡は掘立柱建物跡を中心に構成される居住域と土坑墓からなる墓域に分かれている。土坑墓内には火葬骨と共に白磁，カムィヤキの小壺が副葬されている。また，焼土跡は鍛冶炉として使用された可能性がある。

山田中西遺跡の本調査は，今回の調査以前にも県営畑地帯総合整備事業に伴って約5,000㎡実施している。発掘調査では古代～中世の遺構を多数確認しており，今回の調査区もその一部にあたる。



遺跡位置図（1／50,000）

例　　言

1　本報告書は，喜界島通信所整備事業に伴う山田中西遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成15年度に鹿児島県教育庁文化財課が，平成16年度に喜界町教育委員会が防衛庁熊本防衛施設支局の受託事業として実施した。

3　平成16年度の発掘調査は，喜界町教育委員会が鹿児島県教育庁文化財課の指導を受けて実施した。

4　報告書作成は，喜界町教育委員会が平成17年度事業として鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもとに実施した。

5　本書のシリーズ番号は（8）となるが，これは1987年に作成した「ハンタ遺跡」を（2）としているためである。従って，本書以降「ハンタ遺跡」のシリーズ番号を喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）と定める。

6　本書に用いたレベル数値は，海抜絶対高による。

7　遺物番号は全て通し番号とし，本文及び挿図，図版番号とも一致する。

8　遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。遺構は30分の1もしくは60分の1，遺物は3分の1を基本とする。

9　発掘調査については琉球大学教授池田榮史の指導を受けた。

　鉄製品，鉄滓については愛媛大学助教授村上恭通の指導を受けた。

　人骨の取り上げは鹿児島女子短期大学助教授竹中正巳が行い，分析結果を第Ⅵ章に掲載した。

10　本書の執筆，編集は澄田，野崎が担当した。

11　出土した遺物は喜界町教育委員会で保管し，展示・活用する計画である。なお，本遺跡の遺物注記の略号は「山中」である。

目　　次

序文
報告書抄録
例言

第Ⅰ章　調査の経過
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　城久遺跡群の調査概要
第１節　調査の進捗状況 …… 3
第２節　調査の成果 …… 3

第Ⅲ章　位置と環境
第１節　地理的環境 …… 6
第２節　歴史的環境 …… 6

第Ⅳ章　調査の概要
第１節　発掘調査の方法 …… 9
第２節　発見された遺構・遺物 …… 9
第３節　層位 …… 9

第Ⅴ章　古代・中世の調査成果
第１節　遺構
１掘立柱建物跡 …… 12
２土坑墓 …… 17
３焼土を伴う土坑 …… 20
４焼土跡 …… 20
５土坑 …… 21
６柱穴列 …… 22
第２節　古代の遺物
１土師器 …… 22
２須恵器 …… 22
第３節　中世の遺物
１白磁 …… 24
２滑石混入土器 …… 24
３カムィヤキ …… 24
４滑石製石鍋 …… 27
第４節　石器
１台石 …… 30
２凹石 …… 30
３磨石 …… 30
４砥石 …… 30
５金床石 …… 30
６軽石 …… 30
第５節　鉄製品・鉄器生産関連遺物ほか
１刀子 …… 34
２鞴の羽口 …… 34
３鍛冶滓 …… 34
４粘土塊 …… 34

第Ⅵ章　同定・分析
第１節　山田中西遺跡出土の火葬人骨 …… 35
第２節　放射性炭素年代測定 …… 37
第３節　出土炭化材の樹種同定 …… 39

第Ⅶ章　まとめ …… 41

写真図版 …… 44

挿図目次

遺跡位置図
第1図　確認調査トレンチ位置図 ……2
第2図　城久遺跡群遺跡位置図 ……5
第3図　主な島内遺跡位置図 ……7
第4図　山田中西遺跡全体遺構配置図 ……10
第5図　平成15・16年度調査区遺構配置図 …12
第6図　掘立柱建物跡1号 ……13
第7図　掘立柱建物跡2号 ……14
第8図　掘立柱建物跡3号 ……15
第9図　掘立柱建物跡4号 ……16
第10図　土坑墓1号及び副葬品 ……17
第11図　土坑墓2号及び副葬品 ……19
第12図　焼土を伴う土坑・焼土跡 ……20
第13図　土坑1号及び出土遺物 ……21
第14図　土坑2号 ……21
第15図　柱穴列 ……21
第16図　古代の出土遺物（土師器・須恵器） …23
第17図　中世の出土遺物1（白磁・滑石混入土器・カムィヤキ） ……25
第18図　中世の出土遺物2（カムィヤキ） ……26
第19図　中世の出土遺物3（滑石製石鍋） ……28
第20図　中世の出土遺物4（滑石製品） ……29
第21図　出土石器1（台石） ……31
第22図　出土石器2（凹石，磨石，砥石） ……32
第23図　出土石器3（金床石，軽石製品） ……33
第24図　刀子・鞘の羽口・鍛冶滓・粘土塊 ……34
第25図　暦年較正結果 ……38

表目次

第1表　城久遺跡群発掘調査一覧 ……4
第2表　主な島内遺跡地名表 ……8
第3表　掘立柱建物跡1号計測表 ……13
第4表　掘立柱建物跡2号計測表 ……14
第5表　掘立柱建物跡3号計測表 ……15
第6表　掘立柱建物跡4号計測表 ……16
第7表　土坑墓1号出土遺物観察表 ……18
第8表　土坑墓2号出土遺物観察表 ……18
第9表　土坑1号出土遺物観察表 ……21
第10表　古代の遺物観察表1（土師器） ……23
第11表　古代の遺物観察表2（須恵器） ……23
第12表　中世の遺物観察表1（白磁） ……24
第13表　中世の遺物観察表2（滑石混入土器） …24
第14表　中世の遺物観察表3（カムィヤキ） …26
第15表　中世の遺物観察表4（滑石製石鍋・滑石製品） ……29
第16表　石器観察表 ……30
第17表　刀子・鞘の羽口・鍛冶滓・粘土塊観察表 ……34
第18表　山田中西遺跡出土火葬人骨 ……35
第19表　測定資料及び処理 ……37
第20表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 ……37
第21表　山田中西遺跡出土炭化材の樹種同定 …39

図版目次

図版1　遺跡周辺空中写真 ……44
図版2　遺跡遠景 ……45
遺構完掘状況 ……45
土坑墓1号副葬品出土状況 ……45
土坑墓1号完掘状況 ……45
図版3　土坑墓2号副葬品出土状況1 ……46
土坑墓2号副葬品出土状況2 ……46
土坑墓2号副葬品出土状況3 ……46
土坑墓2号完掘状況 ……46
図版4　焼土を伴う土坑1号検出状況 ……47
焼土を伴う土坑1号炭化材出土状況 …47
焼土を伴う土坑2号半掘状況 ……47
焼土跡1号検出状況 ……47
焼土跡1号断面 ……47
焼土跡2号検出状況 ……47
焼土跡2号半掘状況 ……47
焼土跡2号完掘状況 ……47
図版5　土坑墓1号出土カムィヤキ ……48
土坑墓2号出土カムィヤキ ……48
土坑墓1号出土白磁 ……48
土坑墓1号出土滑石 ……48
古代・中世の遺物（土師器・滑石混入土器） ……48
図版6　古代の須恵器 ……49
中世の白磁 ……49
刀子・鞘の羽口（表） ……49
刀子・鞘の羽口（裏） ……49
図版7　カムィヤキ（上：表，下：裏） ……50
図版8　滑石（上：石鍋片，下：二次加工品） ……51
図版9　石器・粘土塊 ……52

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経緯

熊本防衛施設支局は，大島郡喜界町山田地内において，喜界島通信所整備事業を計画し事業区域内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

これを受けて，県文化財課が平成15年６月に分布調査を実施したところ，事業区域は周知の遺跡である山田中西遺跡の隣接地であることが判明した。山田中西遺跡は分布調査時に喜界町教育委員会（以下，町教育委員会）が発掘調査中であり，今回の事業計画区域の隣接地付近では遺構・遺物ともに希薄であった。

事業計画区域内は荒蕪地であり，分布調査でも遺物の散布は確認できなかった。

この結果を受けて，熊本防衛施設支局は事業に着手したが，工事用進入路の掘削工事中に遺物を確認し，喜界町教育委員会を経由して遺跡発見の通知を行った。これを受けて県文化財課は，工事用進入路部分の緊急発掘調査を行うとともに，遺跡の広がりを把握するために確認調査を実施し，約500㎡の範囲で遺構・遺物を確認した。

この結果をもとに，熊本防衛施設支局，県文化財課，町教育委員会は，埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行い，遺跡の現状保存が困難であることから記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

発掘調査は，町教育委員会が調査主体となり，県文化財課の支援を受け，平成16年10月21日から同年12月２日（実働28日）まで実施した。

第2節　調査の組織

平成15年度　緊急発掘調査・確認調査

事業主体者　熊本防衛施設支局
調査主体者　鹿児島県教育委員会
調査統括者
　鹿児島県教育庁文化財課課長　吉永　和人
調査企画者
　鹿児島県教育庁文化財課課長補佐　堂前　博文
　〃　主任文化財主事兼
　埋蔵文化財係長　倉元　良文
調査担当者
　鹿児島県教育庁文化財課文化財主事　井ノ上秀文
事務担当者
　鹿児島県教育庁文化財課主幹兼
　企画助成係長　田中　明成
　鹿児島県教育庁文化財課主査　溝上　政弘
　〃　主事　田中　明美
調査協力　喜界町教育委員会

平成16年度　本調査

事業主体者　熊本防衛施設支局
調査主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
調査責任者
　喜界町教育委員会　教育長　平　義哉
調査企画者
　喜界町教育委員会生涯学習課長　嘉　重久
　〃　課長補佐　福井長次郎
　〃　係長　岩松　利和
　〃　派遣社会教育主事　中尾　奨
調査・事務担当者
　喜界町教育委員会中央公民館主査　澄田　直敏
調査指導者
　鹿児島県教育庁文化財課
　文化財課主事　井ノ上秀文
　琉球大学教授　池田　榮史

平成17年度　整理・報告書作成

事業主体者　熊本防衛施設支局
調査主体者　喜界町教育委員会
企画・調整　喜界町教育委員会生涯学習課
作成責任者
　喜界町教育委員会　教育長　晴永　清道
作成企画者
　喜界町教育委員会生涯学習課長　嘉　重久
　〃　課長補佐　祈　勇
　〃　係長　岩松　利和
　〃　派遣社会教育主事　中尾　奨
作成担当者
　喜界町教育委員会中央公民館主査　澄田　直敏
　〃　埋蔵文化財調査員　野崎　拓司
事務担当者
　喜界町教育委員会中央公民館主査　澄田　直敏
作成指導者
　愛媛大学助教授　村上　恭通
　鹿児島女子短期大学助教授　竹中　正巳

鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　中村　和美
文化財研究員　川口　雅之
作成協力者
京都光華女子大学　百瀬　正恒
太宰府市教育委員会　中島恒次郎
〃　山村　信榮

第3節　調査の経過

1　緊急発掘調査・確認調査（平成15年度）

第1節の発掘調査の経緯でも記したように，平成15年12月24日～25日に鹿児島県教育委員会が調査主体となって緊急発掘調査及び確認調査を実施した。緊急発掘調査では土坑4基，ピット3基を確認したが，遺物包含層は確認されず，遺物もほとんど出土しなかった。土坑のうち1基はカムィヤキの壺と白磁が埋納されているものである。また，遺跡の範囲を明確にするために，周辺の3,200㎡を調査対象として確認調査を実施した。調査は2×5mの確認トレンチを8か所実施した（第1図）。その結果，2，3，4トレンチで古代から中世にかけての遺構・遺物を確認し，遺構・遺物の出土状況から約500㎡の範囲に遺跡が残存していると判断した。

2　本調査（平成16年度）

平成15年度の確認調査の結果を受けて，本調査を平成16年10年21日から12月2日まで実施した。

調査では，まず調査区域内に10m×10mのグリッドを設定し実施した。グリッドは北側から南側方向にA～Bとし，それに直行する西側から東側方向へ1～6と呼称した。

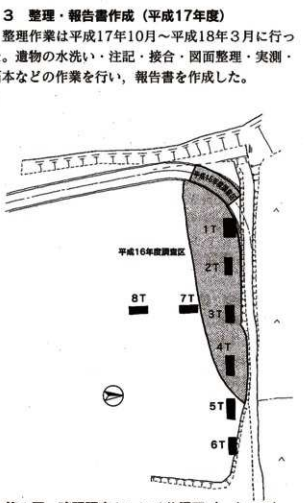
発掘調査は，試掘調査で得られた資料をもとに，遺構検出面直上まで（一部の遺物包含層が残る部分はその直上まで）は表土を重機により除去し，その後，作業員を投入して遺物及び遺構の検出作業を行った。

以下，調査の経過については日誌抄にて記載する。

10月21日（木）～10月22日（金）
荒蕪地であったため，重機により整地。重機・ダンプ稼働状況写真撮影。
10月23日（土），10月30日（土）
重機による表土剥ぎ。
11月1日（月）～11月6日（土）
重機による表土剥ぎ。調査区に水まき・シート敷き。機材を搬入し，環境整備を行う。グリッド設定後，A・B－1～6区Ⅱ，Ⅲ層の遺構検出作業，遺物取り上げ（一括）。遺構検出状況写真撮影。A・B－1，2区Ⅱ層のピット・土坑の掘り下げ。
11月8日（月）～11月13日（土）
レベル移動を行う。A・B－3～6区Ⅱ・Ⅲ層遺構検出，写真撮影，遺物取り上げ（一括）。A・B－1～4区Ⅱ・Ⅲ層の柱穴・土坑の完掘，遺構検出状況平板実測，レベル実測。A・B－1，2区土坑実測，写真撮影。重機による掘り下げ。
11月15日（月）～11月20日（土）
A・B－1～6区Ⅲ層遺構検出，柱穴掘り下げ。A・B－1～6区土坑実測，写真撮影。
11月22日（月）～12月2日（木）
A・B－1～6区柱穴掘り下げ，遺構検出状況平板実測，レベル実測。A・B－1～6区土坑実測，写真撮影。調査区全景写真撮影，機材撤収・プレハブ撤去。

3　整理・報告書作成（平成17年度）

整理作業は平成17年10月～平成18年3月に行った。遺物の水洗い・注記・接合・図面整理・実測・拓本などの作業を行い，報告書を作成した。



第1図　確認調査トレンチ位置図（1／1,000）

第Ⅱ章　城久遺跡群の調査概要

第１節　調査の進捗状況

城久遺跡群の発掘調査は，平成15年度の山田中西遺跡を皮切りに本調査と確認調査を並行して行っている。本調査は山田中西遺跡を平成15・16年度に実施し，平成16年度から継続して山田半田遺跡の本調査を行っている（第１表，第１図）。

平成15年度以降の確認調査は，山田半田遺跡の北側部分と半田口遺跡を平成16年２月に，小ハネ・前畑・大ウフ・半田遺跡を平成17年２月と４月に実施した。平成17年の調査によって，小ハネ・前畑・大ウフ・半田遺跡で古代～中世の遺構・遺物を確認し，赤連遺跡を含む８遺跡全体の総面積が190,000㎡に及ぶことが明らかとなった。この調査によって，現在の城久集落を中心に展開するそれぞれの遺跡を城久遺跡群として位置づけ，一連のものとして開発との調整を行っていく必要が生じてきた。

平成17年６月には，遺跡群の面積が広大であることと，本調査を実施している山田中西・山田半田遺跡で南西諸島では初見となる重要な遺構・遺物が検出されいることから，町教育委員会，県文化財課，県農政部局の三者で遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果，本調査を実施していない半田口・小ハネ・前畑・大ウフ遺跡については，再度確認調査を行い，特に重要な地区を確定し，保存について検討することとなった。

確認調査は平成17年７月に実施し，文化庁と県文化財課の指導を受けた。その中で「現段階の情報で保存する地区とそれ以外の地区を分けることの判断は難しく，更なる確認調査を実施し情報を蓄積する必要がある」ということを指摘された。この指摘を受け，平成17年８月に町教育委員会，県文化財課，県農政部局，町産業振興課で協議し，平成18年２月に追加の確認調査を行い遺跡の取り扱いについて再度協議することで合意した。更に，この協議では平成17年度に本調査を実施した山田半田遺跡の中核部分，約8,000㎡を盛土保存することが決定した。遺跡の取り扱いについては，平成18年２月に実施する確認調査の成果を基に，保存も視野に入れながら開発との調整を図っていく予定である。

第２節　調査の成果

これまでの発掘調査では，古代～中世の遺構・遺物が多数確認され，南西諸島では他に類を見ない大規模な集落跡であることがわかってきている。最も古い遺物は，山田半田遺跡で出土した８世紀代の須恵器の蓋と土師器の甕であるが，出土数が少ない上に同時期の遺物は他になく，その様相は判然としない。

山田中西，山田半田遺跡で主体となる時期は，10世紀代と11世紀後半～12世紀代で，中でも後者の時期に属する遺構・遺物が目立つように思われる。

大ウフ，半田遺跡では13・14世紀頃の遺物も出土していることから，台地側（山田中西側）から海側（半田側）に行くにしたがって遺跡の年代が新しくなる傾向が窺える。

以下，各遺跡について概略を述べる。

(1)　山田中西遺跡

平成14年度に確認調査，平成15・16年度に本調査を実施した。調査面積は約6,000㎡である。古代から中世の掘立柱建物跡６棟，土坑墓９基，炉跡２基，焼土を伴う土坑２基，焼土跡５か所，土坑10基，溝状遺構１条，柱穴列２列，柱穴1,650基の遺構のほか，土師器・須恵器・白磁・越州窯系青磁・焼塩土器・滑石製石鍋・カムィヤキ・刀子・鞴の羽口・鉄滓・石器などが出土している。

(2)　山田半田遺跡

平成14・15年度に確認調査，平成16年度から本調査を実施し，平成17年度までの調査面積は約16,000㎡で現在も調査中である。古代から中世の掘立柱建物跡43棟，土坑墓３基，炉跡２基，土坑16基，古道１条，柱穴4,000基のほか，土師器・須恵器・越州窯系青磁・焼塩土器・灰釉陶器・初期高麗・白磁・滑石製石鍋・カムィヤキ・鉄製品・鞴の羽口・石器などが出土している。建物には奄美地域特有の１間×１間，１間×２間の掘立柱建物跡も多く見られる。前者には柱穴直径が1.2ｍと大きく，しかもその四方を30本の柱穴によって囲む特殊な構造のものが１棟確認されている。さらに，柱穴直径が50㎝を超える２間×２間の総柱の建物跡や２間×３間の掘立柱建物跡の四方に計34本の柱穴を配置する大型の建物がある。

(3)　半田口遺跡

平成15～17年度に確認調査が実施され，古代から中世の柱穴・溝状遺構・土坑などのほか，土師器・白磁・滑石製石鍋・カムィヤキ・青磁など

の遺物が出土している。

(4) 小ハネ遺跡

平成17年度に確認調査が実施され，古代から中世の溝状遺構や柱穴のほか，越州窯系青磁・白磁・カムィヤキなどの遺物が出土している。

(5) 前畑遺跡

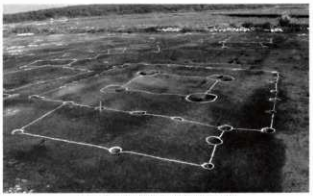
平成17年度に確認調査が実施され，古代から中世の柱穴のほか，土師器・滑石・鞴の羽口などの遺物が出土している。

(6) 大ウフ遺跡

平成16・17年度に確認調査が実施され，古代から中世の柱穴・溝状遺構・土坑のほか，土師器・須恵器・越州窯系青磁・カムィヤキ・龍泉窯系青磁などの遺物が出土している。

(7) 半田遺跡

平成16・17年度に確認調査が実施され，古代から中世の土坑墓・溝状遺構・土坑・柱穴のほか，越州窯系青磁・白磁・滑石製石鍋・カムィヤキ・ガラス玉・龍泉窯系青磁などの遺物が出土した。中世の土坑墓は，２基隣接するように配置され，それぞれの土坑墓から人骨が出土した。１号は若年の女性，２号は壮年の男性で共に木棺に納められていた可能性がある。



山田半田遺跡掘立柱建物跡群

半田遺跡出土人骨

第１表　城久遺跡群発掘調査一覧

遺跡名	調査の種類	調査期間	調査面積	時代	遺構	遺物	調査主体
山田中西	本調査	平成15年5月～8月	5,400㎡	古代～中世	掘立柱建物跡，土坑墓，炉跡，土坑，焼土跡，溝状遺構，柱穴列	土師器，須恵器，焼塩土器，越州窯系青磁，白磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，鞴の羽口ほか	町教育委員会
山田中西	本調査	平成15年12月 平成16年10月～12月	500㎡	古代～中世	掘立柱建物跡，土坑墓，焼土を伴う土坑，焼土跡，土坑，柱穴列	土師器，須恵器，青磁，白磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，刀子，鞴の羽口ほか	県文化財課・町教育委員会
山田半田	本調査	平成16年5月～8月 平成17年4月～	13,000㎡	古代～中世	掘立柱建物跡，土坑墓，古道，炉跡，土坑	土師器，須恵器，焼塩土器，越州窯系青磁，白磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，鞴の羽口ほか	町教育委員会
半田口	確認調査	平成15年2月 平成16年2月 平成17年7月 平成18年2月	1,030㎡	古代～中世	柱穴，溝状遺構，土坑	土師器，カムィヤキ，白磁，滑石製石鍋，青磁ほか	町教育委員会
小ハネ	確認調査	平成17年4月～5月 平成17年7月 平成18年2月	150㎡	古代～中世	柱穴,溝状遺構	カムィヤキ，白磁ほか	町教育委員会
前畑	確認調査	平成17年4月～5月 平成17年7月 平成18年2月	140㎡	古代～中世	柱穴	土師器，滑石，鞴の羽口ほか	町教育委員会
大ウフ	確認調査	平成16年2月～3月 平成17年7月 平成18年2月	340㎡	古代～中世	柱穴，土坑，溝状遺構	土師器，須恵器，カムィヤキほか	町教育委員会
半田	確認調査	平成17年2月～3月，4月～5月,7月 平成18年2月	480㎡	古代～中世	柱穴，土坑墓，溝状遺構，土坑	カムィヤキ，白磁，滑石製石鍋，青磁，人骨，ガラス玉ほか	町教育委員会

第２図　城久遺跡群遺跡位置図（1／10,000）

第Ⅲ章　位置と環境

第１節　地理的環境

喜界島は鹿児島県本土から南へ約380km，奄美大島から東へ約25kmの北緯28度19分，東経130度線上の太平洋と東シナ海の洋上に浮かぶ島である。現在でも約２mmずつ隆起し，学術的にも非常に貴重な島といわれている。１島で１町をなし，南東に長く14km，北東部から南西部にかけて次第に幅を広げ，その周囲50.0km，面積56.9km²である。

概して平坦な隆起珊瑚礁の島で，島内で最も高い所は島の中央東側にある百之台で標高は214mある。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し，広い段丘地形が見られる。これに対して南東部は急崖となり，海岸線にそってわずかな平坦地が見られるだけである。こうした地形のために，河川の発達は乏しく，用水のほとんどは地下水や湧水に依存している。海岸線は単調で褐礁からなっているため，港として利用できる場所は限られている。代表的な港としては湾，早町，志戸桶，小野津があり，各集落では港を背に必ず砂丘が形成されている。砂丘上では，縄文時代から近世までの遺物が採取でき，古くから人々の生活が営まれていたことをうかがい知ることができる。

気候は亜熱帯性気候で年平均気温22.2℃と，年間を通して温暖である。年間の降水量は3,000mmに達し，島内の大部分はサトウキビ畑である。本島の基盤をなしているのは，新生代新第三紀鮮新世の島尻層で，琉球石灰岩，志戸桶層，隆起珊瑚石灰岩，砂丘が上層を形成している。また，マージと呼ばれる暗赤褐色土壌が島の大部分を覆っている。

山田中西遺跡は，島内で最も標高の高い城久集落を取り巻く８遺跡の総称である城久遺跡群の１つである。遺跡群は，喜界島の中央部の標高90m～160mの海岸段丘上に立地している。島内の段丘は，巨視的に見て４段あり，遺跡群は２番目に標高の高い中位段丘の縁辺部に展開している。山田中西遺跡はその中でも，最も高所に位置し，遺跡の標高は160m程である。遺跡周辺に河川はないが，湧水点がいくつか点在する。例えば遺跡北側の城久集落内に３か所（ウマヌッサー，イィンカーハー，イチィンマーハー）残っている。また，滝川集落内には，島内でも名を知られている滝川の泉がある。これらの湧水は崖下にあることが多く，島尻層と琉球石灰岩の不整合面から湧出するといわれている。

第２節　歴史的環境

喜界島における考古学的研究は，戦前は昭和６年の重野豊吉による荒木貝塚の発見に始まり，三宅宗悦による湾貝塚・手久津久貝塚の報告がある。

戦後においては，昭和30年代に九学会連竜美大島共同調査委員会考古学班による分布調査が行われ，荒木農道遺跡，荒木小学校遺跡，湾天神貝塚，伊実久厳島神社貝塚，七城などが紹介されている。

中世においては源氏や平家にまつわる伝承や地名が数多く残っていることも１つの特徴である。今回調査した山田中西遺跡の近くにも僧俊寛の言い伝えが残る場所がある。また，志戸桶の「七城」や早町の「平家森」は，平家の落人の残したものであると伝えられている。小野津の「雁股の泉」については，源為朝にまつわる伝承も残っている。

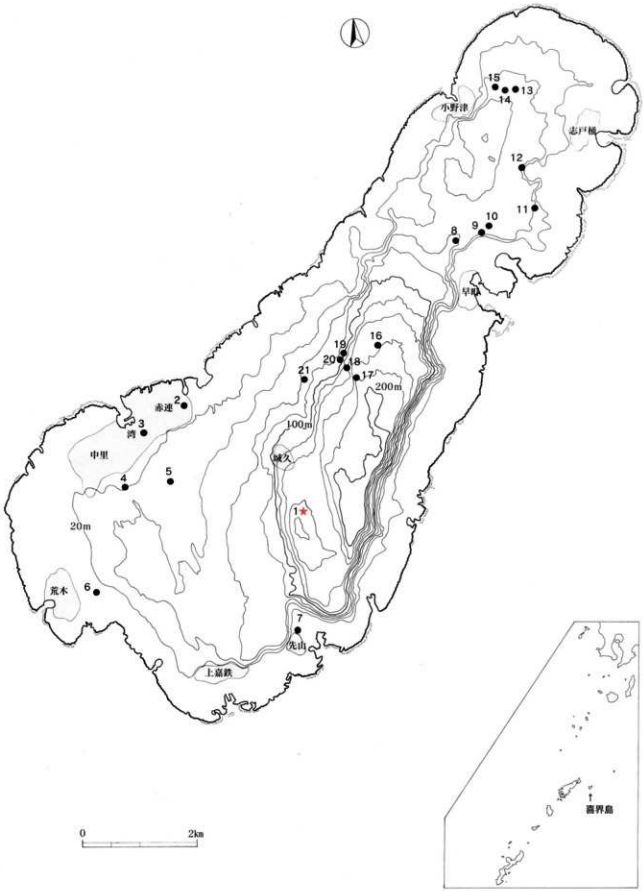
１　縄文時代

島内で最も古い縄文時代の遺跡は，平成13年に発見された総合グラウンド遺跡である。遺跡では口縁端部に刻目があり，両端の尖った施文具による連続刺突文と４～６条の横条線が交互に施されて，砲弾形の器形をなす大型の深鉢土器と，４条程度を１単位として押し引き条線が施される砲弾形の小型の土器や，爪形文土器，石器，そして３層の貝層などが確認されている。この大型土器に付着していた煤を放射性炭素年代測定分析にかけ，約7,000年前という数値が出ており，遺跡の範囲確認とともに他の遺物などのさらなる検討が必要となってきている。また，昭和27年に県立喜界高等学校校庭拡張工事に伴って出土した土器は，赤連系土器と名付けられ，縄文時代前期といわれている。昭和61年には熊本大学によるハンタ遺跡の発掘調査が実施され，宇宿上層式期の住居跡群やかまど状遺構が確認された。遺物は，面縄西洞式・喜念Ⅰ式・宇宿上層式などの土器，石斧・敲石・クガニイシなどの石器が出土している。平成16年には，喜界町役場新庁舎工事に伴い見付山遺跡の発掘調査が行われ，石鏃や黒曜石が本町で初めて発見されている。遺跡の時期は縄文時代晩期頃と考えられている。

２　弥生時代～古墳時代併行期

弥生時代の遺跡は発掘調査は行われてはいないが分布調査などで荒木小学校遺跡などの数遺跡が確認されている。

古墳時代並行期の遺跡は，昭和61年に喜界町教育委員会による先山遺跡の発掘調査が実施され，兼



第3図　主な島内遺跡位置図

久式土器や貝斧などが報告されている。その他には中里貝塚など約20遺跡が確認されている。

3　古代・中世

古代・中世の遺跡は昭和63年に島中B遺跡，平成4年にオン畑・巻畑B・巻畑C遺跡，平成5年に前ヤ遺跡，平成6年に提り遺跡などの発掘調査が実施されている。また，本町の大多数の遺跡がこの時期に属している。

〈参考・引用文献〉
喜界町　2000『喜界町誌』
喜界町教育委員会　1987『先山遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
喜界町教育委員会　1987『ハンタ遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
澄田直敏・堂込秀人・池畑耕一　2003「喜界町総合グラウンド遺跡（弓道場）出土の土器」『鹿児島考古』第37号　鹿児島県考古学会

第2表　主な島内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物	備考
1	山田中西	喜界町山田	海岸段丘	古代～中世	掘立柱建物跡，土坑墓，鍛冶炉，土師器，須恵器，焼塩土器，越州窯系青磁，白磁，カムイヤキ，滑石製石鍋，鉄製品，鞴の羽口，貝玉	平成14年確認調査 平成15・16年本調査
2	赤連	喜界町赤連	海岸段丘	縄文	赤連式土器	現喜界高校
3	湾天神	喜界町湾	海岸段丘	縄文	土器，石器，貝製品，獣骨	
4	総合グラウンド	喜界町湾	砂丘	縄文	土器，石器，貝，獣骨	
5	竿ク	喜界町湾	海岸段丘			削平により消失した可能性
6	荒木貝塚	喜界町荒木	低地	縄文	石器，貝	
7	先山	喜界町浦原	海岸段丘	縄文～近世	面縄前庭式・轟久式土器，石器，貝，獣骨	昭和61年調査
8	平家森	喜界町早町	山頂	中世	規模・形状：200×200m 複郭	
9	後田	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
10	水口	喜界町塩通	海岸段丘			削平により消失した可能性
11	堤り	喜界町塩通	海岸段丘	古代～中世	須恵器，カムイヤキ，白磁，青磁，滑石製石鍋，石器，獣骨	平成6年調査
12	七城	喜界町志戸桶	台地	中世	規模・形状：200×200m 複郭	
13	オン畑	喜界町小野津	海岸段丘	古代～近世	掘立柱建物跡，炉跡，溝状遺構，カムィヤキ，鉄滓	平成4年調査
14	巻畑C	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器，カムィヤキ，滑石製石鍋	平成4年調査
15	巻畑B	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器，須恵器，滑石製石鍋，鞴の羽口，鉄滓	平成4年調査
16	ハンタ	喜界町西目	海岸段丘	縄文	住居跡群，かまど状遺構，中宿上層式土器，土製品，石器，カムィヤキ，青磁	昭和61年調査
17	前ヤ	喜界町島中	海岸段丘	古墳～中世	青磁，カムィヤキ	平成5年調査
18	ウ川田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器，土師器，白磁，青磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，染付	平成5年調査
19	上田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	柱穴，土器，青磁，カムィヤキ	平成5年調査
20	向田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器，土師器，白磁，青磁，カムィヤキ，滑石製石鍋，染付	平成5年調査
21	島中B	喜界町島中	海岸段丘	古代～近世	土器，内黒土師器，須恵器，白磁，青磁，鞴の羽口，鉄滓，石器，染付	昭和63年調査

第Ⅳ章　調査の概要

第１節　発掘調査の方法

平成15年の緊急発掘調査は，工事用進入路建設のために掘削が行われている部分のうち，遺構の広がりが確認された70㎡について実施した（第４図）。調査は，工事により表土が除去されていたので，精査を行い遺構を検出する作業から始めた。包含層は確認されず遺物はほとんど出土しなかった。検出された土坑墓や土坑については写真撮影や図面作成作業を実施した。また，調査した遺構の広がりを参考にしながら，遺跡の範囲を明確にするために確認調査を行った。確認調査は２×５ｍ程のトレンチを８か所設定し，遺構の広がりを確認した。

平成16年度の本調査は，西から東方向に１・２…，北から南方向にＡ・Ｂとする10ｍ間隔の調査用グリッドを設定して実施した。伐採などの環境整備を実施した後，重機によって表土を除去し，遺物包含層であるⅡ層を人力で掘り下げ，Ⅲ層上面で遺構検出を行った。検出した遺構については，掘り下げを行い，写真撮影や50分の１の遺構配置図，10分の１の個別図の作成を行った。なお，掘立柱建物跡の復元は，整理作業の段階で図上復元を行った。発掘調査終了後は，プレハブなどの撤収を終え熊本防衛施設支局へ調査現場を引き渡した。

第２節　発見された遺構・遺物

平成15・16年度の調査では，古代～中世（８世紀～12世紀）の遺構・遺物が発見された。遺構は，掘立柱建物跡４棟，土坑墓３基，焼土を伴う土坑２基，焼土跡２か所，土坑５基，柱穴列１列，柱穴250基を検出した。遺物は土師器・須恵器・白磁・滑石製石鍋・カムィヤキ・刀子・石器などが出土した。調査成果の詳細については，第Ⅴ章でふれることとする。なお，陶磁器の分類は大宰府分類を参考にしている。

時期区分については，以下の文献に従い大宰府Ⅺ期（11世紀中頃）以降を中世，それ以前を古代としている。

参考文献

山本信夫・山村信榮　1997「中世食器の地域性10-九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館

第３節　層位

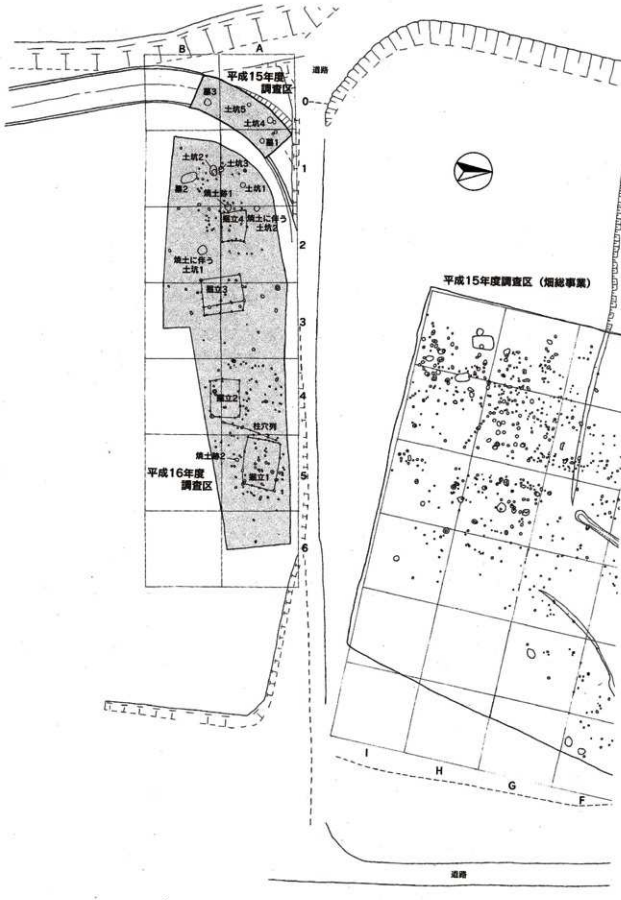
遺跡の土層は大きく４層に分けることができる。石灰岩の風化土壌であるために堆積は薄く，表土から基盤層までの深度は40㎝程である。

Ⅰ層 ── 灰褐色粘質土で，サトウキビ畑の耕作土として利用されている。

Ⅱ層 ── 硬質の黒褐色粘質土で古代・中世の遺物包含層である。削平されている地点も多い。鉄製品と人骨の保存状態は比較的良好であるが，土師器の残りは非常に悪い。層厚は10～20㎝で，炭化物・焼土を多く含んでいる。

Ⅲ層 ── 赤褐色粘質土で一般にマージと呼ばれる遺跡の基盤層である。

Ⅳ層 ── 隆起珊瑚礁である。調査区の至る所に露頭がみられる。



第４図　山田中西遺跡全体遺構配置図（1／500）

平成15年度調査区
6
5
4
3
2
1
E
D
C
B
A
a
遺跡

第Ⅴ章　古代・中世の調査成果

第１節　遺　構

１　掘立柱建物跡

４棟の掘立柱建物跡を検出した。主軸の向きは東西方向を基本とし，建物の平面プランは，長方形を呈する。１・２号と３・４号はそれぞれ近接して配置され，その間は遺構の密度が低い。

(1)　掘立柱建物跡１号（第６図）

長軸方向は東西方向に設定された４間×３間のやや歪んだ建物である。柱穴の直径は25cm程で，柱穴の深さは30～80cmである。南側の柱穴は地山の削平のために浅くなった可能性がある。また，Ｐ12はその形状から想定して，柱の建替えがあった可能性が考えられる。Ｐ４で滑石製石鍋が出土した。

出土遺物（第19図50）

50はやや内湾する口縁部片である。全体的に摩滅している。工具痕が残っていない部分は２次加工として磨いた可能性がある。

(2)　掘立柱建物跡２号（第７図）

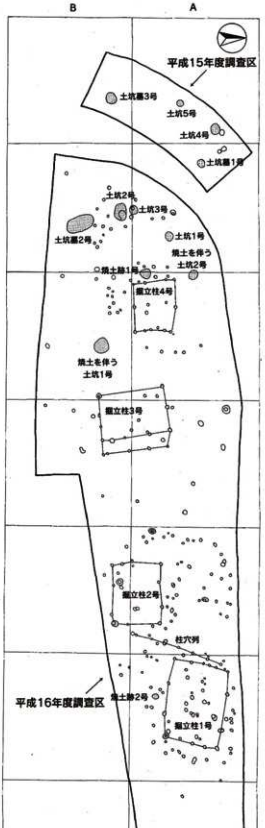
長軸方向は東西方向に設定された南北２間（西側３間），東西３間の建物である。柱穴は直径30cm程の円形で，深さは20～80cmである。Ｐ10で滑石製石鍋が出土した。

出土遺物（第19図48）

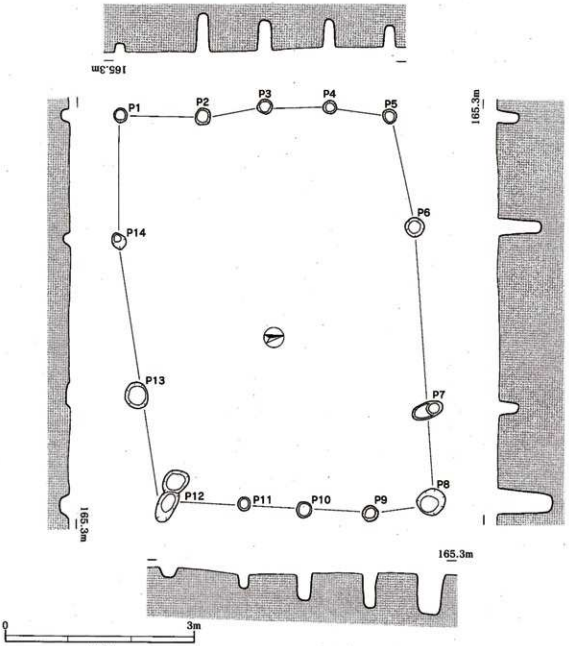
48は柱穴から出土したものと包含層中から出土したものを3点接合している。直径約4mmの穿孔を方形把手部分に１か所，破損部に１か所施す。外面には鑿痕が残っているが，一部は摩滅のため，見えなくなっている。内面には製作時の痕跡と思われる線状痕が多数残されている。口縁部片は約６分の１残存している。推定口径26cmである。

(3)　掘立柱建物跡３号（第８図）

主軸が南北方向を向く片廂の建物で平面プランは方形に近い。母屋の柱間は桁行，梁行ともに不揃いで，特に桁行の西側は１間となる。母屋の柱穴直径は30cm程であるが，廂部分の柱穴は母屋に比べてやや小さくなる傾向がある。柱穴の深さは15～90cmとばらつきがある。Ｐ１で滑石製品（54），Ｐ２でカムィヤキ（35，36），Ｐ３で凹石（74），Ｐ４で土師器（12）・磨石（75），Ｐ



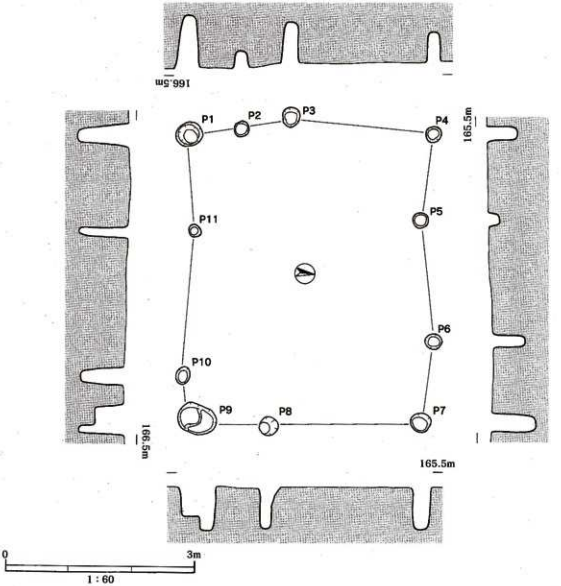
第５図　平成15・16年度調査区遺構配置図（1／300）



第６図　掘立柱建物跡１号

第３表　掘立柱建物跡１号計測表

	梁		行			桁		行			
(1—5間	420cm)		平均	105cm	(1—12間	620cm)		平均	206cm	方向(N90° E)	
(12—8間	430cm)		平均	107cm	(5— 8間	620cm)		平均	206cm		
1—2	100cm	12—11		95cm	1—14	150cm	5—6		175cm	P直径	20～40cm
2—3	105cm	11—10		105cm	14—13	290cm	6—7		250cm	P深さ	10～70cm
3—4	95cm	10— 9		100cm	13—12	180cm	7—8		195cm	床面積	26.4㎡
4—5	120cm	9— 8		130cm							



第7図　掘立柱建物跡2号

第4表　掘立柱建物跡2号計測表

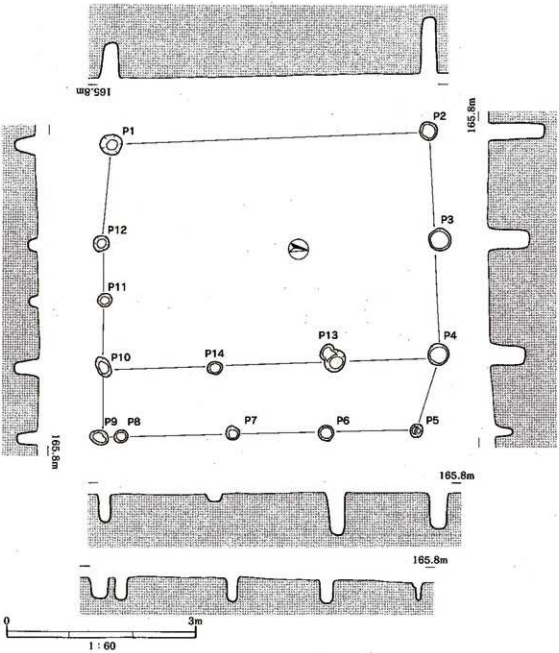
梁		行		桁		行			
(1—4間	390cm)	平均	130cm	(1— 9間	470cm)	平均	155cm	方向(N82° E)	
(9—7間	350cm)	平均	175cm	(4— 7間	460cm)	平均	153cm		
1—2	80cm	8—7	250cm	1—11	135cm	4—5	130cm	P直径	15～50cm
2—3	80cm	9—8	100cm	11—10	195cm	5—6	190cm	P深さ	15～70cm
3—4	230cm			10— 9	140cm	6—7	130cm	床面積	17.1㎡

13で砥石（78）が出土した。

出土遺物（第16・17図12・35・36，第19図54，第　22図74・75・78）

12は土師器の甕で口唇部が先細りし，内面の稜が曖昧なものである。内外面が摩滅しており，調整痕は残っていない。54は滑石製品で胴部を加工して作られている。下面と左側面を擦り切っており，52と同様にある程度擦った後に折った痕跡が観察できる。この破片はさらに折り取った部分を磨いて次のステップへ加工を進めている。

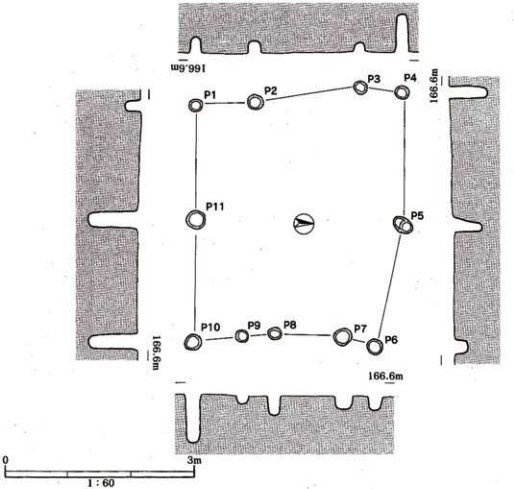
74は凹石であるが，表裏と上面は敲打によって凹んでいる。側面に磨面を形成していることから，敲打具と磨石の機能を併せ持っている。75は扁平な自然石を利用した小型の磨石である。砂岩製で表面に磨面を形成する。78は砥石で方形状に形が整えられている。正面・裏面・側面に砥面がみられ，よく使い込まれているために浅く凹んでいる。正面にみえる2本の溝跡は砥ぎ痕の可能性がある。



第８図　掘立柱建物跡３号

第５表　掘立柱建物跡３号計測表

桁		行		梁		行			
(1－ 9間 (2－ 5間	465cm) 480cm)	平均 平均	116cm 160cm	(1－ 2間 (10－ 4間 (9－ 5間	505cm) 535cm) 505cm)	平均 平均	178cm 128cm	方向(N15°W)	
1－12	160cm	2－3	175cm	10－14	175cm	9－8	35cm	P直径	20～40cm
12－11	90cm	3－4	185cm	14－13	195cm	8－7	175cm	P深さ	10～70cm
11－10	110cm	4－5	125cm	13－ 4	165cm	7－6	150cm	床面積	16.8㎡
10－ 9	110cm					6－5	145cm		



第９図　掘立柱建物跡４号

第６表　掘立柱建物跡４号計測表

梁		行		桁		行		方向（N84° E）	
（１—４間	325cm）	平均	108cm	（1—10間	372cm）	平均	186cm		
（10—6間	295cm）	平均	74cm	（4— 6間	402cm）	平均	201cm		
1—2	90cm	10—9	80cm	1—11	180cm	4—5	210cm	P直径	15～25cm
2—3	170cm	9—8	50cm	11—10	192cm	5—6	192cm	P深さ	20～65cm
3—4	65cm	8—7	110cm					床面積	12.2㎡
		7—6	55cm						

(4)　掘立柱建物跡４号（第９図）

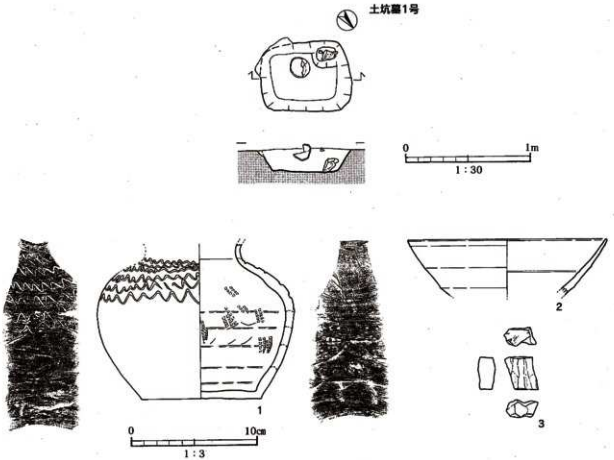
長軸方向は東西方向に設定された南北３間（東側４間），東西２間の建物で，本調査区の中で最も規模が小さい。柱穴は直径25cm程の円形を呈し，深さは15cm～80cmとばらつきがある。梁行間の柱穴は不均等である。Ｐ１で須恵器（16）・カムィヤキ（28・30・37・40・41）・滑石混入土器（23）・滑石製品（60），Ｐ２で台石（67）・砥石（77）が出土した。

出土遺物（第16～18図16・23・28・30・37・40・41，　第20～22図60・67・77）

16は須恵器の甕である。内外面には平行線状のタタキ痕が一部残っているが，それ以外は摩滅しているため，不鮮明である。胎土には極小の白色粒を含む。

23は滑石混入土器の底部片である。胎土には滑石粒の他に赤色粒や白色の砂粒を少量含む。粘土帯の接合部が明瞭に残っている。内外面の調整は粗いナデもしくはケズリと考えられる。28・30・37・40・41はカムィヤキの壺もしくは甕である。28は外面に平行線状のタタキを施し，内面には格子目状の当て具痕が部分的に残っている。37は，外面に平行線状タタキ，内面に格子目状の当て具痕が部分的に残る。40は内外面横ナデ調整で，外面に平行線状のタタキを残し，内面には格子目状の当て具痕が残る。

60は滑石製品で胴部を加工した錘状製品と考える。上部に穿孔が１か所あり，ぶら下げて使用されていたためか，穿孔部が三角形状を呈している。内面には製作時の研磨痕が残っている。長さ



第10図　土坑墓１号及び副葬品

5.8cm，幅1.7cm，重さ26ｇである。

67は台石である。磨面が斜めになるため，下に何かを置いて平らにして使用した可能性がある。磨面の中央と上下両端，左側面に敲打痕が残る。特に右側面を強く打ち付けているために，部分的に剥離している。砂岩製である。77は砥石で正面と側面に磨面が形成されている。側面には２本の鋭い溝がみられ，鉄器を砥いだ可能性もある。砂岩製で一部焼けている。

２　土坑墓

Ａ－Ｏ区とＢ－Ｏ・１区で３基の土坑墓が確認された。墓坑の形態に違いがあるものの焼骨と炭化物が残っている点は共通している。また，土坑墓１・２号は副葬品にカムィヤキの壺をもつ点も共通している。

(1)　土坑墓１号（第10図）

工事中に発見されたもので，上部はすでに削平されていた。平面は隅丸方形を呈し，長径×短径は72×55cmである。埋土はⅡ層の黒褐色土で，最深部の深さは19cmである。焼骨と炭化材を検出し，カムィヤキの壺（１）と白磁碗（２）が副葬されている。また，サンゴ塊が南西隅の床面近くに置かれていた。その他の遺物としては，　滑石製品が出土した。遺構の時期は，白磁の形態から12世紀中頃～12世紀後半頃と考える。

副葬品（１，２，３）

１は土坑墓１号より出土した小型の壺である。口縁部を欠出している以外は完形品で残器高12.2cm，底径9.3cm，最大胴径14.5cmを測る。肩部は緩やかに張り出し，そこに７本のヘラ描波状文を施す。底部は安定した平底である。胎土は比較的精製されており，色調は青灰色である。一部うまく還元されていない所があり，赤褐色を呈す。外面は平行線状タタキ後ナデ，内面は回転横ナデを施す。内面には当て具跡が部分的に残り，接合痕が2cm間隔で見られる。全体的にやや雑な仕上がりである。２は白磁の碗で，口縁部から胴部にかけての資料である。口縁部は約2分の1程残存している。体部が直線的に開き，口縁は直口する。器壁が薄く，灰緑色の釉が薄くかかっている。内面には浅い沈線が巡り，内外面に細かな貫入がみられる。推定口径15.6cm，残器高は4.4cmである。大宰府分類椀Ⅷ－２類に相当すると考えられ，12世紀中頃～12世紀後半頃に位置づけられる。３は滑石製品である。縦1.7cm，横1.5cmの小型品で，上下両面を擦っている。

(2) 土坑墓２号（第11図）

長方形を呈しており，長径×短径は215×100㎝である。深さは25㎝あり，底面はほぼ平坦である。南端にカムィヤキの壺（４）が副葬されており，その脇に炭化物と焼骨片の混在したかたまりがあった。その範囲は25×20㎝程で，厚さは５㎝程であった。それらは，元々の掘り込み面を５㎝ほど埋め戻して床を作りその上に置かれたものと考えられる。

壺の中に焼骨片は入れられておらず，蔵骨器というよりは副葬品の可能性が高い。南端で焼骨片と炭化物が部分的に検出されている状況から，土坑墓内の被葬者が改葬され再び同じ墓坑に埋葬された可能性がある。

副葬品（４）

４は完形品で，口径9.5㎝，最大胴径18㎝，底径9.8㎝，器高12.7㎝である。頸部は短く屈曲し，口唇部をナデによって面取りしている。肩部の張りは１よりも強く，底部は大きく安定した浅い上げ底である。胴部のプロポーションは左右非対称で，やや雑なつくりである。頸部の付け根から上胴部にかけて，ヘラ描波状文と横沈線文を施す。その組み合わせは，波状文（３条）→横沈線文（１条）→波状文（３条）→横沈線文（１条）→波状文（１条）となっている。下胴部には焼成後に１×2.5㎝の穿孔を施している。孔は外面から穿ち，内面はそのときの衝撃で孔の周辺が剥離している。外面は口縁部が横ナデ，胴部は平行タタキ後ナデ消しである。内面は口縁部が横ナデ，胴部には正格子の当て具痕が横方向に列をなして残っている。胎土には１～３㎜大の白色砂粒，黄色砂粒を含み，色調は灰色である。焼成はカムィヤキの中でも軟質な方で，全体的に摩滅している。

(3) 土坑墓３号

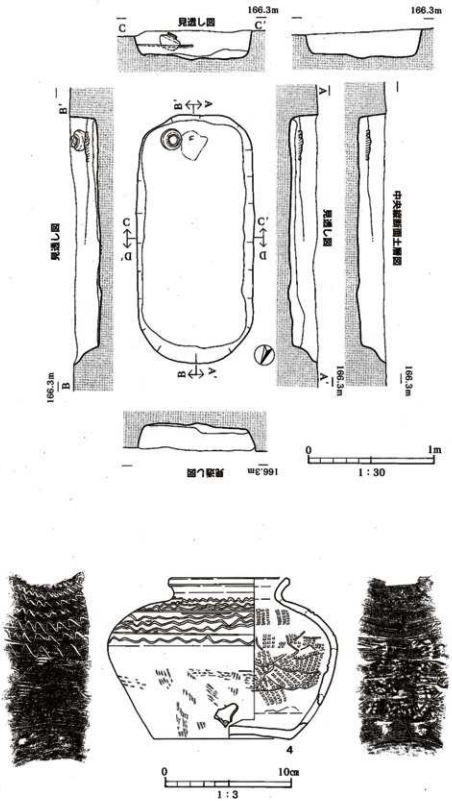
平面形は直径100㎝程の円形を呈している。木炭片が多量に混入し，焼骨と思われる細片も混入していた。

第７表　土坑墓１号出土遺物観察表

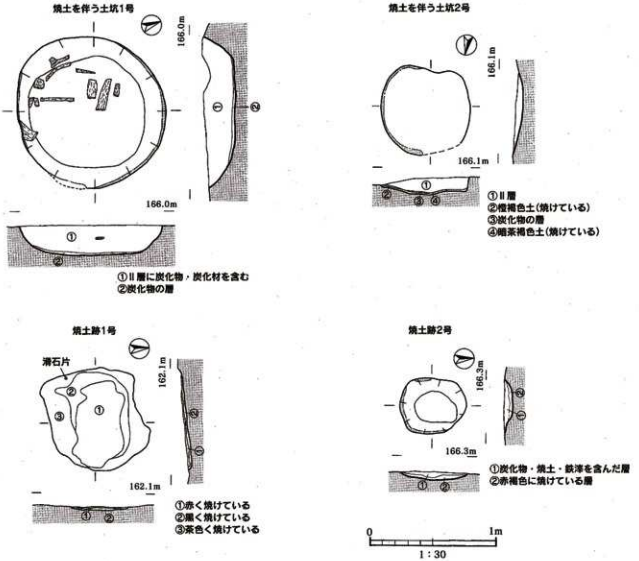
図No	図面番号	遺構	遺物	器種	口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
10	1	土坑墓１号	カムィヤキ	壺		9.3		良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転横ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
	2	土坑墓１号	白磁	椀	15.6			良好	灰緑色	灰緑色			大宰府分類Ⅷ-2
	3	土坑墓１号	滑石製石鍋										

第８表　土坑墓２号出土遺物観察表

図No	図面番号	遺構	器種	口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
11	4	土坑墓２号	壺	9.5	9.8	12.7	良好	灰色	灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転横ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る 口縁部一部破損　底部に穿孔



第11図　土坑墓２号及び副葬品



第12図　焼土を伴う土坑・焼土跡

3　焼土を伴う土坑

A・B－2区で2基検出された。

(1)　焼土を伴う土坑1号（第12図）

平面形は直径120cm程のほぼ円形を呈している。埋土には大きめの炭化材（木炭）が含まれ，壁面及び床面は全体的によく焼けていて暗赤褐色を呈している。よく焼けている状態は平面でもほぼ観察できる。床面は平坦で，炭化物が敷き詰められていた。最深部の深さは24cmである。

(2)　焼土を伴う土坑2号（第12図）

平面形はほぼ円形を呈しており，81×78cmである。埋土は4層に分けられ，炭化物の層（③）も見られる。壁面及び床面はよく焼けていて平面でも観察できる。最深部の深さは10cmである。

4　焼土跡

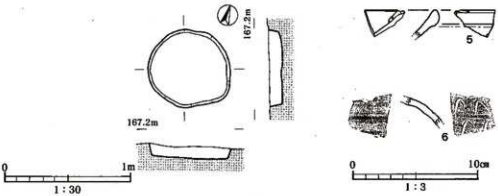
A－2区とA－5区で2基検出した。

(1)　焼土跡1号（第12図）

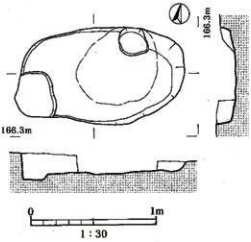
平面形はほぼ方形を呈しており，長径×短径は81×74cmである。平面では焼け具合によって3層に分けられるが，断面では2層しか確認できなかった。最も焼けている部分は①の部分で赤褐色を呈し，固くしまっている。周辺部ほど焼け方が弱くなり，②の部分は黒褐色，③の部分は茶褐色である。最深部の深さは4cmである。

(2)　焼土跡2号（第12図）

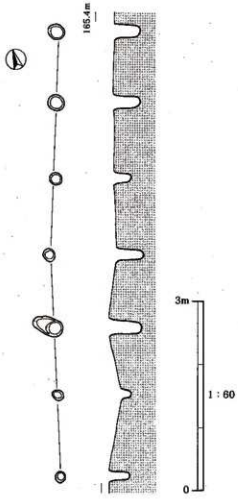
平面形は楕円形を呈しており，長径×短径は55×45cmである。底面は浅いすり鉢状でよく焼けており，その直上には炭化物・焼土・鉄滓を含んだ層が堆積している。最深部の深さは7cmである。



第13図　土坑１号及び出土遺跡



第14図　土坑２号



第15図　柱穴列

鉄滓を含んでいることから，鍛冶炉の可能性が考えられる。

5　土坑

Ａ－Ｏ区～Ｂ－１区で５基の土坑を検出した。そのうち２基を報告する。

(1)　土坑１号（第13図）

平面形はほぼ円形を呈しており，長径×短径は72×66cmである。床面は平坦で，最深部の深さは10cmである。埋土はⅡ層の一枚で，カムィヤキ（６）１点と白磁椀（５）１点が出土した。土坑の時期は，白磁椀Ⅳ類の年代から11世紀後半～12世紀前半頃と考えられる。

第９表　土坑１号出土遺物観察表

図No	図面番号	出土区	遺構	遺物	器種	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
13	5	Ａ１	土坑１号	白磁	椀	黒色粒	良好	黄灰色	黄灰色			
	6	Ａ１	土坑１号	カムィヤキ	壺・甕		良好	青灰色	青灰色	回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ状工具による波状沈線文

出土遺物（5，6）

5は土坑1号から出土したものである。口縁が玉縁状を呈し，黄灰色味を帯びたやや厚めの釉を施す。全体的に白色を呈している。大宰府分類の椀Ⅳ類に相当する。11世紀後半～12世紀のものである。6は土坑1号よりの出土で，外面にヘラ状工具によって波状文を2本施している。内面は回転ナデ調整である。

(2) 土坑2号（第14図）

平面形は隅丸長方形を呈しており，長径×短径は130×76cmである。最深部の深さは21cmである。床面は平坦で北東部と南西部に落ち込みが見られる。また，Ⅱ層を掘削中に検出した掘り込みが土坑の中央部を切っている。

6 柱穴列（第15図）

A－4・5区で1列検出された。南北軸に並んだ7本の柱穴からなる。それぞれの柱穴の距離は1.1～1.3mで，柱穴は直径25cm程，深さは15～40cmである。場所は掘立柱建物跡1号と掘立柱建物跡2号の間に位置する。

第2節 古代の遺物

1 土師器（第16図7～13）

本調査区では当時の在地土器である兼久式土器は出土していない。出土した土器の器形や調整・胎土などからいわゆる土師器であると考えられるため，ここでは土師器とする。

本遺跡で出土した土師器は，小破片を含めて22点あり，そのうち図化できたのは6点である。A－2～5区で出土しているが，分布に偏りはみられない。図化した土師器片は全て甕であると考えられる。

7～10は口縁部で内面の稜がはっきりしているものである。胎土は全体的にざらついた感じで，長石・石英・砂粒等が多く含まれている。7は「く」の字状に屈曲する口縁部である。胴部内面にケズリを施していると考えられるが，全体的に摩滅していて，はっきりと観察できない。焼成は良好である。8は口縁部に比べ胴部の器壁が薄い。内外面は摩滅している。9は7同様に「く」の字の口縁になると考えられる。外面はナデ調整，内面は摩滅している。10は器壁が薄く，口唇部に厚みをもつ。口縁部の内外面はナデ調整，胴部内面はケズリを施しているが，摩滅している。11は内面が摩滅しているため，明瞭な調整痕は見えなかった。外面はナデている。

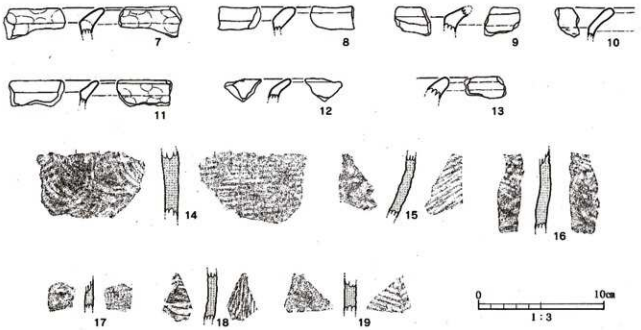
12は口唇部が先細りし，内面の稜が曖昧なものである。内外面が摩滅しており，調整痕は残っていない。掘立柱建物跡3号に伴う出土遺物である。

13は口唇部である。やや厚ぼったくなる口縁の破片で，8に近い形態になると考えられる。

2 須恵器（第16図14～19）

14～19はカムィヤキとは明らかに胎土・調整等が違うことから，本土系の須恵器の破片であると考えられる。山田中西遺跡で出土した須恵器は，小破片を含めて7点あり，そのうち図化したのは5点である。出土している須恵器片は小破片の胴部であり，口縁部・底部は見られない。また，そのほとんどが甕になると考えられる。

14は厚みのある胴部片で，還元が不十分なため芯部は赤褐色を呈する。外面は平行線状のタタキ，内面には同心円状の当て具痕が残る。胎土に白色砂粒を多く含む。カムィヤキである可能性もある。15は外面に平行線状のタタキが明瞭に観察できる。外面に自然釉のようなものがかかっている。内面は浅い当て具痕が残り，胎土には直径1mm前後の白色砂粒のほかに，直径8mmの小石も混入している。16の内外面には平行線状のタタキ痕が一部残っているが，それ以外は摩滅しているため，不鮮明である。胎土には極小の白色粒を含む。掘立柱建物跡4号に伴う出土遺物である。17は外面に格子目状のタタキを施す。内面は摩滅している。18は平行線状のタタキが観察できる。内面にも当て具痕があるが，小破片のため判別ができない。胎土は比較的精製されたものを使用している。19の外面は磨耗のため不鮮明ではあるが，平行線状のタタキがみられる。15と同様に自然釉のようなものが付着している形跡がある。胎土には白色の砂粒が混入している。



第16図　古代の出土遺物（土師器・須恵器）

第10表　古代の遺物観察表１（土師器）

図No	図面番号	出土区	層序	遺構	器種	部位	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
16	7	A−4	Ⅱ層		甕	口縁	白色粒，黒色鉱物	良好	暗褐色	褐色	ナデ	摩滅	
	8	A−5	Ⅱ層		甕	口縁	石英，砂粒	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	摩滅	摩滅	胴部内面はケズリか。
	9	A−4	Ⅱ層		甕	口縁	白色粒	良好	暗褐色	褐色	ナデ	ナデ，一部摩滅	
	10	A−2	Ⅱ層		甕	口縁	石英，長石，砂粒	良好	にぶい橙色	暗褐色	ナデ	ナデ，ケズリ	
	11	A−3	Ⅱ層		甕	口縁	白色粒，赤色粒	良好	暗褐色	褐色	ナデ	摩滅	
	12	A−3	Ⅲ	掘立3号（P4）	甕	口縁	石英，砂粒	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	摩滅	摩滅	
	13	A−4	Ⅱ層		甕	口縁	白色粒，鉱物	やや良	暗褐色	褐色	ナデ	摩滅	

第11表　古代の遺物観察表２（須恵器）

図No	図面番号	出土区	層序	遺構	器種	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
16	14	A−3	Ⅱ層		甕	多量の白色砂粒	良好	青灰色	青灰色	回転ナデ	同心円状当て具	
	15	A−5	Ⅱ層		甕	白色粒・小石	良好	暗オリーブ褐色	灰色	平行線状タタキ	回転ナデ	外面に自然釉
	16	A−2	Ⅱ	掘立4号（P1）	甕	極小の長石・白色の細砂	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	平行線状タタキ	平行線状当て具	
	17	A−5	Ⅱ層		甕		良好	灰色	灰色	格子目状タタキ	摩滅	外面の格子目タタキは不鮮明
	18	A−5	Ⅱ層		甕	白色粒	良好	暗褐色	灰色	平行線状タタキ	摩滅	
	19	A−3	Ⅱ層		甕	灰色土・黄白色土	良好	摩滅	灰オリーブ	平行線文タタキ	ナデ	胎土は灰色土と黄白色土が入り混じった特徴的なもの

第3節　中世の遺物

1　白磁（第17図20～22）

本遺跡で出土した白磁は，小破片を含めて7点あり，そのうち図化できたのは5点である。器種は全て椀である。

20は玉縁状を呈する口縁部の破片で，約8分の1残存している。釉色はやや暗い黄白色を呈しており，やや厚めに施釉されている。断面では玉縁部分の接合部分に若干の空間が認められる。推定口径16.8cmを測る。21は端反りの椀である。灰白色でやや暗めの釉色を呈し，若干厚めに施釉される。22の釉薬は黄白色を呈し，薄くかかっている。

大宰府分類ではそれぞれ，2は椀Ⅷ－2類，5は椀Ⅳ類，20は椀Ⅳ類，21は椀Ⅴ類，22も椀Ⅴ類に相当すると考えられ，11世紀後半～12世紀後半に位置づけられる資料群である。

2　滑石混入土器（第17図23・24）

滑石混入土器とは，混和材として滑石粉を混入する，南島特有の土器である。滑石製石鍋等を模倣して作られたと考えられる。本遺跡で出土した滑石混入土器は，小破片を含めて11点あり，そのうち図化できたものは2点である。

23は底部片である。胎土には滑石粒の他に赤色粒や白色の砂粒を少量含む。粘土帯の接合部が明瞭に残っている。内外面の調整は粗いナデもしくはケズリと考えられる。掘立柱建物跡4号に伴う出土遺物である。24も底部の破片である。微細に破砕された滑石細粒が大量に混入されている。内外面摩滅している。

3　カムィヤキ（第17図25～39，第18図40～47）

カムィヤキは徳之島伊仙町で焼かれた焼物である。還元焔で焼成されるため，器の表面は青灰色を呈するが，還元が不十分なため芯部は赤褐色の色調を示す。胎土には微細な白色粒子を含む。本遺跡で出土したカムィヤキは，小破片を含めて32点あり，そのうち図化したのは23点である。

(1)　椀

25は口縁部が玉縁状を呈すことから，白磁椀Ⅳ類を模倣したものと考えられる。胎土には1mm程の白色粒子を混入し，器表面に直径7mm程の小石が確認できる。外面は回転横ナデ，内面はハケ目調整である。推定口径は16.4cmを測る。

(2)　甕・壺

26～29は甕もしくは壺の上胴部である。26は壺であると考えられる。胎土には1mm以下の微細な白色砂粒が多量に混入し，所々に1～3mm程の黄色砂粒が確認できる。外面は平行線状タタキの後にナデられている。内面は回転横ナデを施し部分的に格子目状の当て具痕が観察できる。内面には幅2cmの間隔で接合痕が残っている。推定胴径27.6cmである。27は器壁が薄い。外面は平行線状タタキ，内面はヘラ状工具回転調整である。28は外面に平行線状のタタキを施し，内面には格子目状の当て具痕が部分的に残っている。掘立柱建物跡4号に伴う出土遺物である。29はヘラ状工具による波状文が2本残っている。内外面ナデ調整である。

30～36は胴部中央付近の破片である。33は推定胴径22ｃｍである。外面は丁寧にナデられていて，タタキ目は見えない。須恵質の陶器である可能性がある。34は推定胴径13.6cmである。胎土は1mm以下の細かな砂粒が多量に含まれているが，直径2～4mm程の大きな砂粒も見える。内面に格子目状当て具痕が少し残っている。

37～44は下胴部の破片である。37の調整は内外面横ナデである。外面に平行線状タタキ，内面に格子目状の当て具痕が部分的に残る。掘立柱建物跡4号に伴う出土遺物である。40は内外面横ナデ調整で，外面に平行線状のタタキを残し，内面には格子目状の当て具痕が残る。掘立柱建物跡4号に伴う出土遺物である。

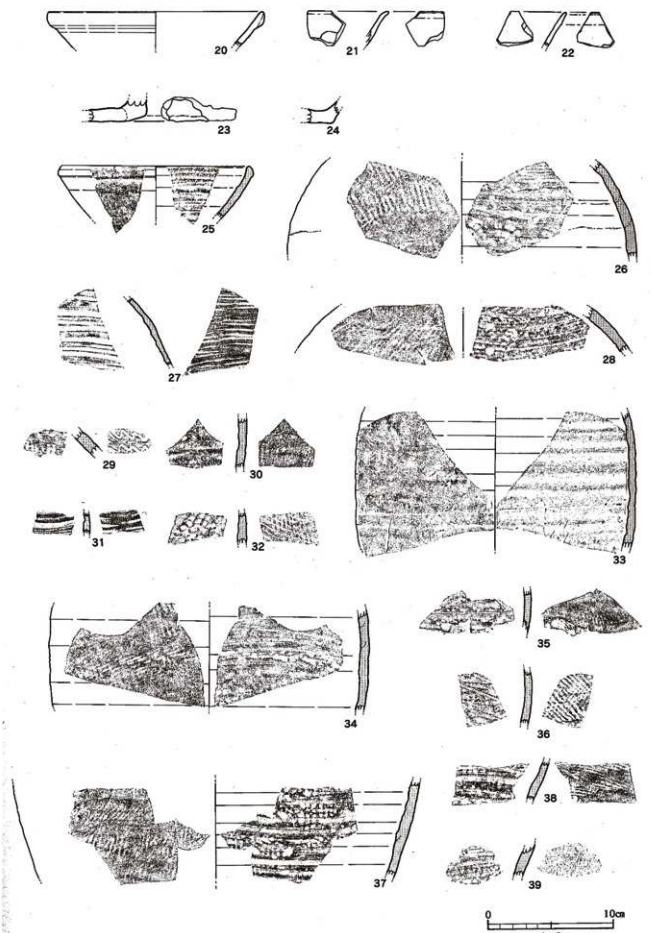
45～47は底部片である。45は下胴部と底面を貼り付けた接合痕が確認できる資料である。底面の厚みは5mm程で下胴部より器壁が薄い。また，内面には格子目状の当て具痕が見える。推定底径18.2cmを測る。

第12表　中世の遺物観察表１（白磁）

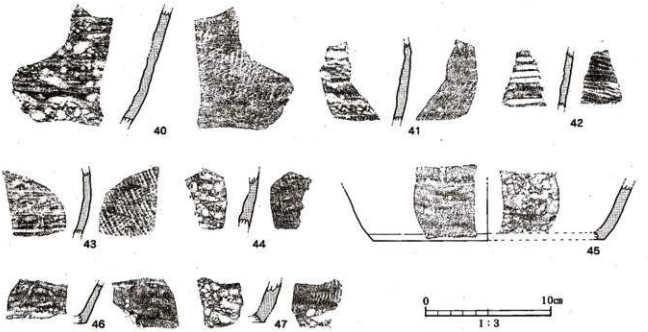
図No	図面番号	出土区	層位	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
17	20	注記消滅	注記消滅		椀	16.8			黒色粒	良好	黄白色	黄白色	玉縁口縁
	21	A１	Ⅱ層		椀				黒色粒	良好	灰白色	灰白色	端反
	22	B２	表採		椀					良好	黄白色	黄白色	端反

第13表　中世の遺物観察表２（滑石混入土器）

図No	図面番号	出土区	層序	遺構	器種	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面
17	23	A２	Ⅱ	掘立4号（P1）	滑石混入土器	滑石粒・赤色粒・白色砂粒	良好	暗褐色	暗褐色	ナデorケズリ	ナデorケズリ
	24	A２	Ⅱ層		滑石混入土器	滑石粒	良好	褐色	灰色	摩滅	摩滅



第17図　中世の出土遺物1（白磁・滑石混入土器・カムィヤキ）



第18図　中世の出土遺物２（カムィヤキ）

第14表　中世の遺物観察表３（カムィヤキ）

図No	図面番号	出土区	層序	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	焼成	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	備考
17	25	B 1	注記消滅		椀	16.4		良好	オリーブ黒色	オリーブ黒色	回転横ナデ	ハケ目	口縁が玉縁状になる
	26	B 2	Ⅲ	P10	壺・甕			良好	灰色	灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転横ナデ	内面で接合痕が２cm間隔でみられる（２か所）推定胴径27.6cm
	27	A 1	Ⅲ	P 9	壺・甕			良好	青灰色	暗青灰色	平行線状タタキ	ヘラ状工具回転調整	
	28	A 2	Ⅱ	掘立4号(P1)	壺・甕			良好	灰色	灰色	平行線文タタキ	回転ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
	29	A 1	Ⅱ層		壺・甕			良好	暗青灰色	にぶい褐色	ヘラ状工具による波状沈線文	回転ナデ	
	30	A 2	Ⅱ	掘立4号(P1)	壺・甕			良好	青灰色	暗青灰色	回転ナデ	回転ナデ	
	31	A 1	Ⅱ層		壺・甕			良好	青灰色	暗青灰色	平行線状タタキ	ハケ目	
	32	A 2	表採		壺・甕			良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転ナデ	内面に格子目状の当て具痕が残る
	33	A 3 B 3	Ⅱ層 Ⅲ	P13	壺・甕			良好			回転ナデ	回転ナデ	内外面丁寧にナデられている。推定胴径22cm　２点接合
	34	B 2	Ⅲ	P10	壺・甕			良好	暗灰色	灰色	平行線状タタキ後ナデ	回転ナデ	内面に格子目状当て具痕が部分的に残る 推定胴径13.6cm
	35	A 2	Ⅱ	掘立3号(P2)	壺・甕			良好	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	内面に格子目状の当て具痕がかすかに残る
	36	A 2	Ⅱ	掘立3号(P2)	壺・甕			良好	青灰色	暗青灰色	平行線状タタキ	回転ナデ	
	37	A 2	Ⅱ	掘立4号(P1)	壺・甕			良好	灰色	灰色	平行線文タタキ後回転横ナデ	回転横ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
	38	B 1	Ⅱ層		壺・甕			良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ	回転ナデ	
	39	A 2	表採		壺・甕			良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
18	40	A 2	Ⅱ	掘立4号(P1)	壺・甕			良好	灰色	灰色	平行線状タタキ後ナデ	回転ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
	41	A 2	Ⅱ	掘立4号(P1)	壺・甕			良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ後ナデ	回転ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
	42	A 1	Ⅱ層		壺・甕			良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ	ヘラ状工具回転調整	
	43	A 2	Ⅱ	掘立3号(P2)	壺・甕			良好	青灰色	青灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転ナデ	内面に当て具の節がかすかに残る
	44	B 2	Ⅱ層		壺・甕			良好	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	内面に格子目状の当て具痕が残る
	45	A 2	Ⅱ	掘立3号(P2)	壺・甕		18.2	良好	灰色	暗灰色	平行線状タタキ後回転ナデ	回転ナデ	内面に格子目状の当て具痕が残る
	46	A 2	Ⅱ層		壺・甕			良好	暗青灰色	暗青灰色	平行線状タタキ	回転ナデ	内面に格子目状当て具痕が残る
	47	A 2	Ⅲ	P28	壺・甕			良好	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	内面に格子目状の当て具痕が残る

4　滑石製石鍋（第19図48～58，第20図59～65）

滑石製石鍋は主に長崎県西彼杵半島で産出される滑石を利用して作られた鍋である。本遺跡で出土した滑石製石鍋は小破片を含めて79点あり，そのうち図化したのは18点である。出土した滑石片には二次加工と考えられるものが39点，その内穿孔があるものは17点数えられる。総重量734ｇを量る。

48～50は口径が復元できた石鍋である。

48は柱穴から出土したものと包含層中から出土したものを3点接合している。直径約4㎜の穿孔を方形把手部分に１か所，破損部に１か所施す。外面には鑿痕が残っているが，一部は摩滅のため，見えなくなっている。内面には製作時の痕跡と思われる線状痕が多数残されている。口縁部片は約６分の１残存している。推定口径26cmである。掘立柱建物跡２号に伴う出土遺物である。49は縦耳の破片である。外面は全体的に火を受けて，黒く変色し，煤も付着している。また，一部摩滅し工具痕が見えなくなっている。推定口径22.4cmを測る。50はやや内湾する口縁部片である。全体的に摩滅しており，工具痕が残っていない部分は２次加工として磨いた可能性がある。掘立柱建物跡１号に伴う出土遺物である。51は土坑１より出土した破片である。全体的に火を受け，黒く変色している。底部片の可能性もある。

52～65は滑石製石鍋片に対して再加工を施してあるものである。

52～54は石鍋片から擦り切り技法によってパーツを割り取った，２次加工品の素材であると考えられる。また，形状が三角形を呈しているため，意図的に割り取った素材であると考えられる。52は右側面に内外面から擦り切った痕跡が認められ，ある程度擦った後に折り取っている。54は胴部を加工して作られている。下面と左側面を擦り切っており，52と同様にある程度擦った後に折った跡が観察できる。掘立柱建物跡３号に伴う出土遺物である。この破片はさらに折り取った部分を磨いて次のステップへ加工を進めている。53は胴部の破片であり，52・54と同様に擦り切った痕跡が見られる。また，内外面には鋭利な工具を使って縦方向に溝を彫っている。

55～57は石鍋片を研磨しているものである。２次加工品の素材もしくは製作途中の未製品である可能性が考えられる。

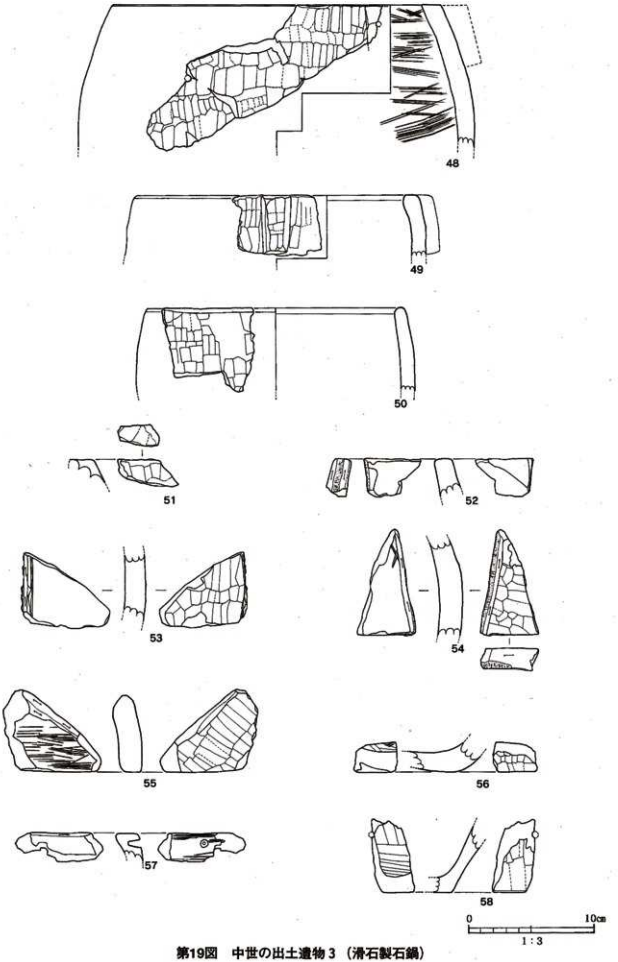
55は胴部片で，内面には擦痕が見られる。断面を２面研磨して加工している。52～54のように三角形状を呈しており，折り取った部分を磨いている可能性がある。56は底部の破片で底面を磨っているものである。57は直径5㎜の穿孔があるが未貫通である。口縁部上面と思われる部分には擦痕があり，入念に磨いていることから，この面を２次加工している可能性が高い。

58は底部で，下胴部に1か所穿孔が見られる。穿孔の直径は5㎜程で貫通している。外面下部は火を受けて黒く変色し，煤も付着している。内面も上部に煤が付着している。また，内外面には調整痕が多数見られる。

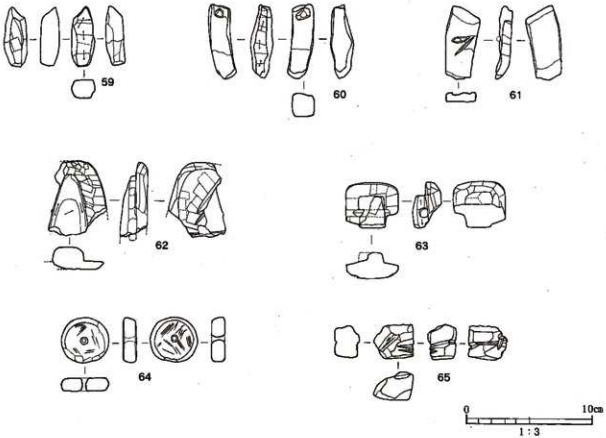
59～65は加工品である。

62はスタンプ形の製品である。把手部分は研磨による擦痕が多数あり，鑿痕は残っていない。把手の真ん中付近には横方向に直径5㎜の穿孔がある。下の部分は方形状に加工しているものと考えられる。裏面はやや凹んでおり，割り取る際に施した可能性のある溝状の痕跡が2か所見られる。また，丁寧に磨かれている。63もスタンプ形の製品である。大きさは把手部で縦2.5cm，横2cm，下部では縦4.5cm，横４cmで，全体の形状は方形になると推定できる。把手部分は下部の中心に沿って作られており，規格性がある。これも把手部に直径6㎜の穿孔があり，穿孔の平面形は略方形に近い形状を呈している。全体的に磨耗している。裏面は62と違い，丸味を帯びている。

59は滑石を棒状あるいは錘状に加工した製品である。全体的に摩滅している。長さ4.7㎝，幅1.8㎝，重さ19ｇである。60は胴部を加工した錘状製品と考える。上部に穿孔が一か所あり，ぶら下げて使用されていたためか，穿孔部が三角形状を呈している。内面には製作時の研磨痕が残っている。長さ5.8㎝，幅1.7㎝，重さ26ｇをである。掘立柱建物跡４号に伴う出土遺物である。61は板状に加工された可能性がある。穿孔の痕跡が残っており，そこには錆びた鉄器片が付着している。裏面は平坦に整形している。64は紡錘車状に加工した製品である。全体的に丁寧に磨かれている。直径3.5㎝，重さ27ｇである。65は立方体状の滑石片を割り取ろうとしているのか，４面に溝を彫っている。割り取り以外の用途として錘等の重りとしての可能性も考えられる。長さ2.6㎝，幅3.1㎝，重さ26ｇである。



第19図　中世の出土遺物３（滑石製石鍋）



第20図　中世の出土遺物４（滑石製品）

第15表　中世の遺物観察表４（滑石製石鍋・滑石製品）　（数字は穿孔数　未貫通も含む）

図No	区画番号	出土区	層序	遺構	種別	部位	重量（g）	穿孔痕	備考
19	48	A－4	II層		滑石製石鍋		345	2	B－4 III と接合
		B－4	III	掘立2号（P10）	滑石製石鍋				A－4 II－括と接合
		B－4	III	掘立2号（P10）	滑石製石鍋				A－4 II－括と接合
	49	B－1	II層		滑石製石鍋	口縁部	112		縦耳　表面黒色（煤か？）
	50	A－5	III	掘立1号（P4）	滑石製石鍋	口縁部	100		表面摩滅
	51	A－1	II	土坑１	滑石製品	口縁or底部	26		外器面に煤付着
	52	A－4	II	P4	加工途中品		30		折られている跡有り
	53	A－4	III	P2	加工途中品		110		折られている跡有り
	54	B－2	III	掘立3号（P1）	加工品		95		折ったのをさらに加工
	55	B－1	II	P2	加工品		125		折ったのをさらに加工
	56	B－4	III	P2	加工品	底部	60		底面が磨られている。
	57	A－1	II	P5	加工品		36	1	穿孔途中
	58	A－4	III	P2	滑石製品	底部	40	1	煤付着
20	59	A－3	II層		加工品		19		棒状加工品？
	60	A－2	II	掘立4号（P1）	加工品		26		錘状加工品
	61	A－2	III	P5	加工品？		25		板状？加工品
	62	A－5	II層		加工品		52	1	バレン状製品　隅丸方形状
	63	A－5	II層		滑石製品		22	1	バレン状製品　方形状
	64	A－2	III層		加工品		27	1	紡錘車状加工品
	65	A－3	II層		加工途中品？		26		立方体状加工にさらに切れ込み

第4節　石器

1　台石（第21図66～72）

66は自然礫を利用した台石である。砂岩製で表裏に磨面を形成し，中心部には敲打痕がわずかに残る。重さ4,300ｇである。67は磨面が斜めになるため，下に何かを置いて平らにして使用した可能性がある。磨面の中央と上下両端，左側面に敲打痕が残る。特に右側面を強く打ち付けているために，部分的に剥離している。砂岩製である。掘立柱建物跡４号に伴う出土遺物である。68は破片であるが，大きさから台石の一部と考えられる。正面に磨面が残る。69は花崗岩を用いて作られた厚みのある台石である。表面が全体的に剥離しており，使用痕は観察できない。70は表裏に磨面を形成し，片面には敲打痕も見られる。71は全面に火を受けて破砕している。正面と側面に磨面を形成している。72は表裏に磨面を形成している。裏面は大部分が剥離している。表面に鉄分が付着し，被熱していることから，金床石の可能性もある。

2　凹石（第22図73・74）

73は花崗岩を用いて作られた方形の凹石で，表面は全体的に剥離している。４側面が凹んでいて，さらに上下両面も浅く凹んでいる。74も凹石であるが，表裏と上面は敲打によって凹んでいる。側面に磨面を形成していることから，敲打具と磨石の機能を併せ持っている。掘立柱建物跡３号に伴う出土遺物である。

3　磨石（第22図75・76）

75は扁平な自然石を利用した小型の磨石である。砂岩製で表面に磨面を形成する。掘立柱建物跡３号に伴う出土遺物である。76は小さな円礫を利用している。正面に磨面を形成する。砂岩製で，縦4㎝，横6.2㎝，重さ58ｇである。

4　砥石（第22図77・78）

77は正面と側面に磨面が形成されている。側面には2本の鋭い溝がみられ，鉄器を砥いだ可能性もある。砂岩製で一部焼けている。掘立柱建物跡４号に伴う出土遺物である。78は方形状に形が整えられている。正面・裏面・側面に砥面がみられ，よく使い込まれているために浅く凹んでいる。正面にみえる２本の溝跡は砥ぎ痕の可能性がある。掘立柱建物跡３号に伴う出土遺物である。

5　金床石（第23図79・80）

79・80は断面方形でよく焼けており，敲打痕に伴って鉄分が付着していることから金床石と考える。

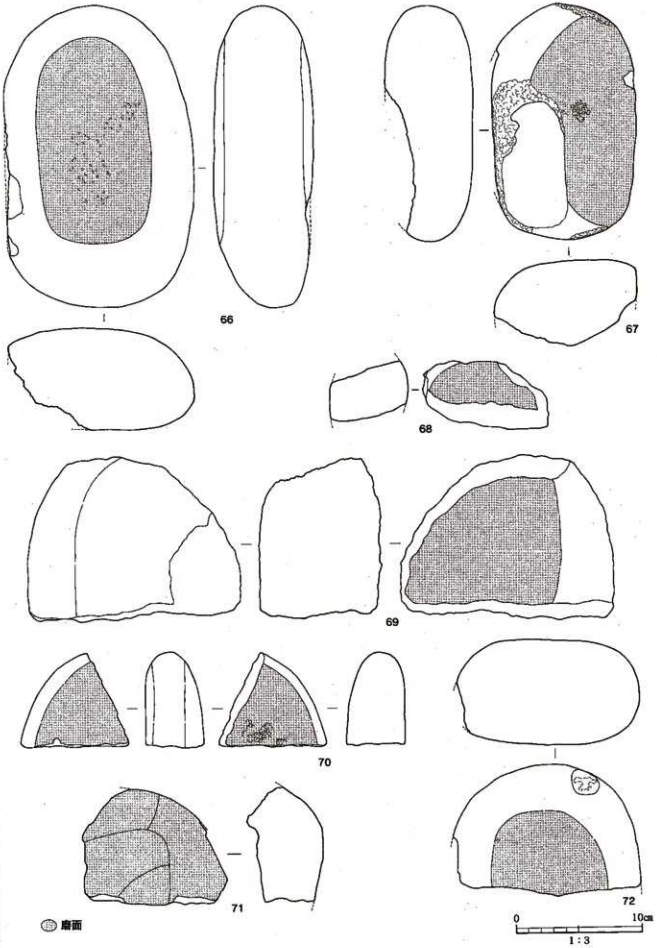
79は砂岩製で断面方形を呈する。それぞれの面に磨面が形成され，表裏両面には敲打痕が見られる。特に正面の敲打痕は顕著に残り，浅く凹んでいる。全体がよく焼けている。80は全面に渡って焼けている。正面には剥離かと思われる浅い凹みがあり，その一部には鉄分が付着している。砂岩製である。

6　軽石製品（第23図81）

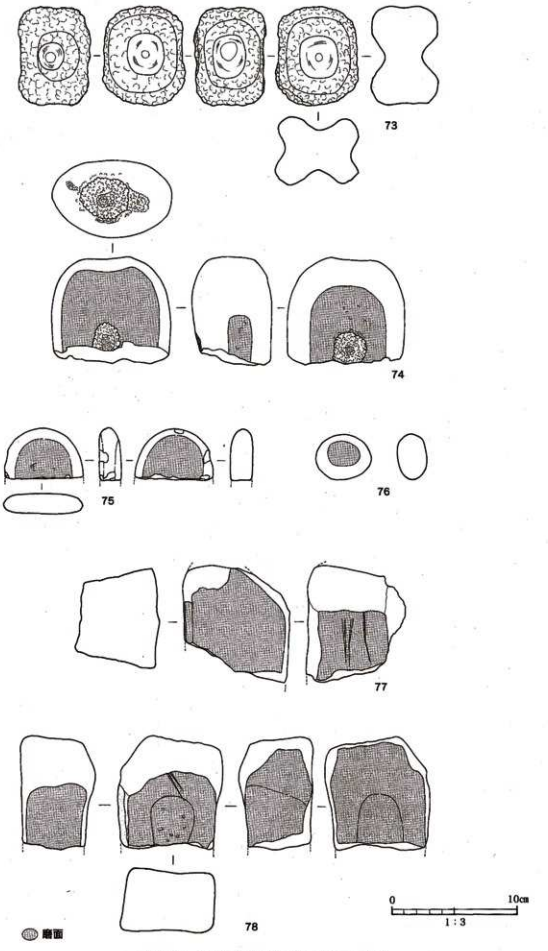
81は正面に幅５cm，深さ２cmの半円形の凹みがある。この溝は何か円形の対象物を擦ったため，形成されたと考えられる。下面には2.2cm×1.2cmの楕円形を呈する孔がある。孔は未貫通である。

第16表　石器観察表

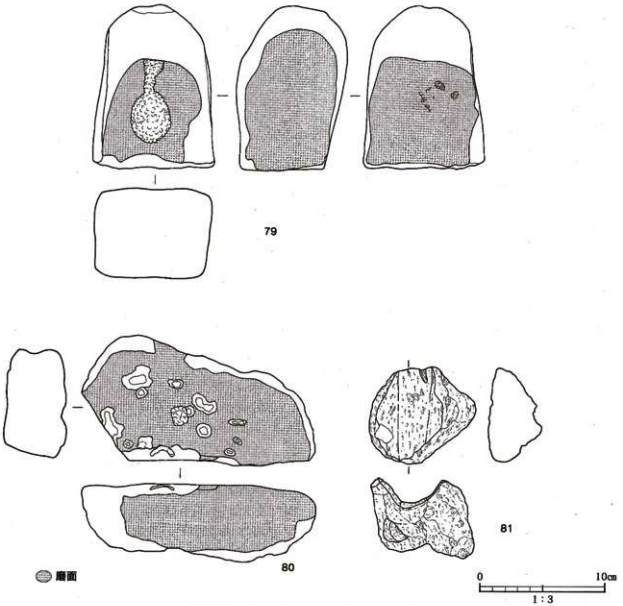
図No	図面番号	出土区	層序	遺構	器種	石材	重量（ｇ）	備考
21	66	Ａ４	Ⅲ	P11	台石	砂岩	4,300	
	67	Ａ２	Ⅲ	掘立４号（P2）	台石	砂岩	1,800	
	68	Ｂ６	表採		台石	砂岩	442	
	69	Ａ４	一括		台石	花こう岩	3,100	表面が剥離。
	70	Ａ５	Ⅱ層		台石	砂岩	425	表裏に敲面有り。一部打痕有り。
	71	Ｂ１	Ⅱ	P4	台石	砂岩	950	全面被熱して破砕。正面・側面に砥面を形成。
	72	Ｂ１	Ⅲ層		台石	砂岩	2,400	表面に鉄分付着。被熱している。裏面は磨面を形成しているが、大部分剥離。
22	73	Ａ４	Ⅲ	P5	凹石	花こう岩	473	表面が剥離。
	74	Ａ３	Ⅲ	掘立３号（P3）	凹石	砂岩	750	台石としての可能性もある。
	75	Ａ３	Ⅲ	掘立３号（P4）	磨石	砂岩	66	
	76	Ａ２	Ⅱ層		磨石	砂岩	58	
	77	Ａ２	Ⅲ	掘立４号（P2）	砥石	砂岩	600	側面一部焼けている。表面に見える傷は砥ぎ痕か。
	78	Ａ３	Ⅲ	掘立３号（P13）	砥石	砂岩	900	表面に見える傷跡は砥ぎ痕になる可能性がある。
23	79	Ａ４	Ⅲ	P43	金床石	砂岩	2,000	全体が焼けている。
	80	Ａ５	Ⅲ	P6	金床石	砂岩	1,300	全面に渡って焼けている。
	81	Ａ３	Ⅲ	掘立３号（P4）	軽石製品	軽石	67	溝に何か円形の対象物を擦ったために、形成されたと思われる。



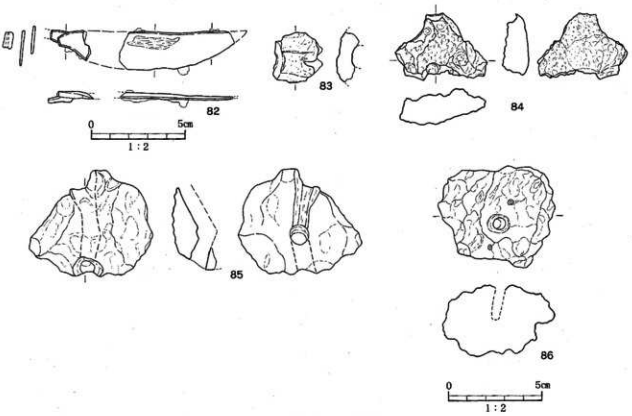
第21図　出土石器1（台石）



第22図　出土石器２（凹石・磨石・砥石）



第23図　出土石器 3（金床石・軽石製品）



第24図　刀子・鞴の羽口・鍛冶滓・粘土塊

第5節　鉄製品・鉄器生産関連遺物ほか

1　刀子（第24図82）

身を欠損しているが全体の長さは10cm前後と推定される。刃部の幅は最大で1.8cm，茎は5mmである。茎と身の厚さは1.2mm程で，非常に薄く均一である。茎は，2つの破片が重なった状態である。これは錆化による付着ではなく，一度折れた破片を再び鍛接しようとしたためと考える。

2　鞴の羽口（第24図83）

鞴の羽口の先端部である。表面は融解し，小さな気泡がある。黒色を呈し，精製された胎土を使用している。推定される内径は1.3cmである。

3　鍛冶滓（第24図84）

椀形鍛冶滓である。縦4.7cm，横8cm，厚み1.5cm，重さ28gで，表面は灰色である。小型であるが，ずっしりと重みがある。表面は緻密で気泡が少なく，光沢がある。裏面は気泡が多く，炉床である土が付着している。

4　粘土塊（第24図85・86）

85・86は粘土塊である。未調整のため，不定形で表面の凸凹が著しい。焼成は軟質で生焼けに近い。86は長さ6.2cm，幅5.4cm，厚み3.5cmである。中央に直径1cm，深さ1.8cmの未貫通の孔がある。85は長さ6.4cm，幅5.6cm，厚み2.2cmである。外面は橙色で，内面は灰黄褐色である。上下二方向から焼成前に直径1cmの孔を穿ち貫通している。孔の新旧関係は不明である。

第17表　刀子・鞴の羽口・鍛冶滓・粘土塊観察表

図No	図面番号	出土区	層序	遺構	器種	法量（cm） 長さ	幅	厚み	重量（g）	焼成	色調 外面	内面	備考
24	82	A 4	Ⅲ	P26	刀子	10	1.8	0.1	9				
	83	A 1	Ⅱ	P 2	鞴の羽口				6				精製された胎土を使用。
	84	B 5	Ⅲ層		鍛冶滓	4.7	3	1.5	28		灰色		
	85	A 2	Ⅲ	P17	粘土塊	6.4	5.6	2.2	48	軟質	橙色	灰黄褐色	上下2方向から焼成前に直径1cmの穿孔。
	86	A 2	Ⅱ	P 4	粘土塊	6.2	5.4	3.5	89	軟質	橙色		中央に直径1cm　深さ1.8cmの未完通の孔有。

第Ⅵ章　同定・分析

第１節　山田中西遺跡出土の火葬人骨

鹿児島女子短期大学
竹中　正巳

鹿児島県大島郡喜界町所在の山田中西遺跡の土坑墓２基から，平成15(2003)年と平成16(2004)年に火葬人骨が木炭と一緒に出土した。検出された火葬骨は歪み，縮小，細片化をきたしており，形態学的検討はほとんどできないが，南九州の火葬習俗を解明する上で貴重な資料となる。以下に火葬骨から得られた所見の概要を報告する。

観察結果

両土坑墓から検出された火葬骨の同定部位を表１に示す。

土坑墓２号から出土した焼骨は土坑墓１号に比べると全身の骨が拾われている。火葬骨の全体量は少ない。歪み，ひび割れ，小骨片化が著しく，原形を保っている部分はほとんどない。変形の度合い，色調に大きな部分差は認められず，比較的均一な変化を受けている。歯は歯根部も含めて一片もみいだせない。以上の所見から，骨化した遺骨を焼いたのではなく，軟部をつけたままの遺体をかなりの温度で，各部に火が行き渡るように消却した状況がうかがえる。また，頭蓋片の量が全量に比較して，やや不自然に少ない。四肢に比べ，脊椎や肋骨などの体幹部の骨が比較的少ない。確認できる限りにおいては，遺存部に重複はなく，１体分の遺骨と考えられるが，他の遺体が混入している可能性は完全には否定できない。成人骨のみで，子供の骨は見いだせないが，子供の骨片が混入している可能性は完全には否定できない。

性判定に有効な部位は土坑墓１号，２号とも見あたらず，性別は両者とも不明である。土坑墓１号は焼骨の出土量も少なく，年齢判定はできない。土坑墓２号は頭蓋や四肢骨片の厚さから，少なくとも成人に達していたと考えられる。

両土坑墓とも火葬骨の遺存量は少ない。通常の体格であれば1体分全身の火葬骨重量は１kgを超えるが，本例のように極めて遺存量が少ないのは，こく一部の焼骨しか拾わないという慣例があったためなのか，あるいは分骨が行われたためなのか，また１次的に埋葬された遺体を一定期間後掘り出し，その白骨を火葬し拾骨されたものなのか，分からない。土坑墓２号の火葬骨破片が細分化されていること，全身にわたって拾骨されていることを考えると，一度埋葬された遺体の骨片を掘り出し，２次的に火葬したという可能性も十分に考えられる。

両土坑墓の火葬骨の色調は，ほとんどが灰白色，純白色または黒色である。焼骨は200℃で焦茶色，400℃で黒色，500℃で灰白色，600℃で純白色，800℃で淡桃色を帯びた乳白色になる（平野，1935）。火葬に付された遺体は400～600℃で焼かれた可能性が高い。

参考文献

平野賢二，1935：歯牙の熱処理に対する研究（第一編）人類歯牙の熱処理に就いて．
口腔病学雑誌，9:375-393.

第18表　山田中西遺跡出土火葬人骨

墓	性別	年齢	重量	同定部位																
				脳頭蓋	上顔部	下顎骨	歯	脊椎	肋骨	肩甲骨	鎖骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手骨	寛骨	大腿骨	膝骨	脛骨	足骨
土坑墓１号	不明	不明	20g	?	?	?	×	○	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
土坑墓２号	不明	成人	360g	○	?	?	×	?	?	?	?	○	?	?	○	?	○	○	○	○

（○：確認、×：なし、？確認不能）

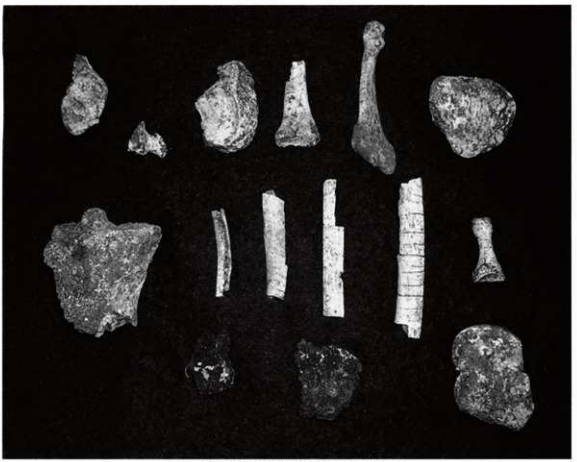


写真　山田中西遺跡土坑墓２号出土火葬人骨

第２節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根　久

1　はじめに

鹿児島県喜界町・山田中西遺跡の２遺構から検出された炭化材試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2　資料と方法

測定試料の情報，調整データは表1のとおりである。試料は調整後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

3　結果

表2に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲，暦年較正に用いた年代値を，第25図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代が^{5}その^{14}C年代誤差内に入る確率が^{5}68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が^{1}一定で半減期が^{5}5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

第19表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4803	試料① 遺構:P20 層位：Ⅲ層	試料の種類：炭化材(ｲﾈﾏﾂ属) 最外年輪以外の年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4804	試料② 遺構：焼土を伴う土坑1号 層位：Ⅲ層	試料の種類：炭化材(広葉樹) 最外年輪以外の年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

第20表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-4803	-27.49±0.13	935±20	936±20	1030AD(10.4%)1060AD 1080AD(57.8%)1160AD	1030AD(95.4%)1160AD
PLD-4804	-27.76±0.13	1075±20	1074±20	900AD(15.7%)920AD 960AD(52.5%)1020AD	890AD(21.3%)930AD 940AD(74.1%)1020AD

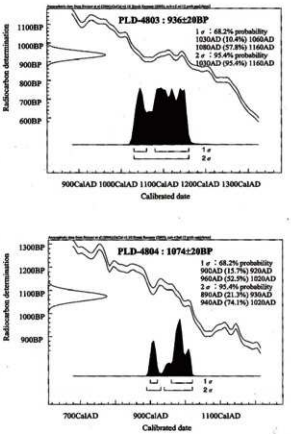
4 考察

試料について，同位体分別効果の補正及び層年較正を行った。得られた層年代範囲のうち，その確率の最も高い年代範囲に着目すると，それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

試料① (PLD-4803) では，1σ歴年代範囲においてCal AD 1080-1160年 (57.8%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 1030-1160年 (95.4%)である。

試料② (PLD-4804) では，1σ歴年代範囲においてCal AD 960-1020年 (52.5%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 940-1020年 (74.1%)である。調査の知見等では，これら遺構は，9世紀後半まで遡る可能性があるものの10世紀～11世紀と予想されている。

木材は，複数年輪から構成されるため最外年輪を測定した場合には，少なくとも木材の伐採年代を示すが，これ以外の年輪部の測定では年代が古くなる。いずれの試料も最外年輪は確認されないことから，測定された年代値が木材の成長年数程度に古いことが考えられる。



第25図　層年較正結果

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

第3節　出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1　はじめに

ここでは，平安時代の10世紀後半～12世紀頃と考えられているB－2区の遺構から出土した炭化材2試料の樹種同定を報告する。1点はB－2区Ⅲ層P20から出土した炭化材の小破片であるが，柱材であった可能性が考えられる。もう1点はB－2区Ⅲ層焼土を伴う土坑1号から出土した炭化材で，取上げ後のサイズは幅約5cm・厚み約2cm・長さ約10cmのものであり，燃料材の可能性が考えられる。なお，同一試料を用いてAMS法による年代測定が実施されている(別報参照)

2　試料と方法

同定は，炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し，次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し，走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は，3断面を5mm角以下の大きさに整え，直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し，試料を充分乾燥させた後，金蒸着を施し，走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は，喜界町教育委員会に保管されている。

3　結果

樹種同定の結果は，P20はシイノキ属，焼土を伴う土坑1号はクスノキ科であった。いずれも常緑広葉樹で，当地域に生育している分類群である。シイノキ属は建築材として利用が知られている樹種であり，クスノキ科も燃料材に利用されることから，出土遺構の性格と樹種利用に矛盾はないと思われる。地域の植生に普通に多く生育していたであろうシイノキ属とクスノキ科が，当時の生活に利用されていた一端をこの炭化材から確認することができたと言える。

材組織記載

(1)シイノキ属　Castanopsis　ブナ科　図版1　1a-1c(P20)

年輪初めにやや小型～中型の管孔が単独で間隔をあけて配列し，さらに数個が放射方向に分布後，小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状，穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性である。

シイノキ属は暖帯から温帯に分布する常緑高木で，照葉樹林の主要素である。関東以西に分布するツブラジイと，福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。材組織はシイノキ属の放射組織はほとんどが単列であるが，スダジイは樹心部に限り集合放射組織が現れることがあり，ツブラジイは樹心以外でも現れる。当遺跡の試料からは集合放射組織は確認できなかったが，炭化材は小破片で正確な材の部位が不明であることから，シイノキ属の同定に留めた。

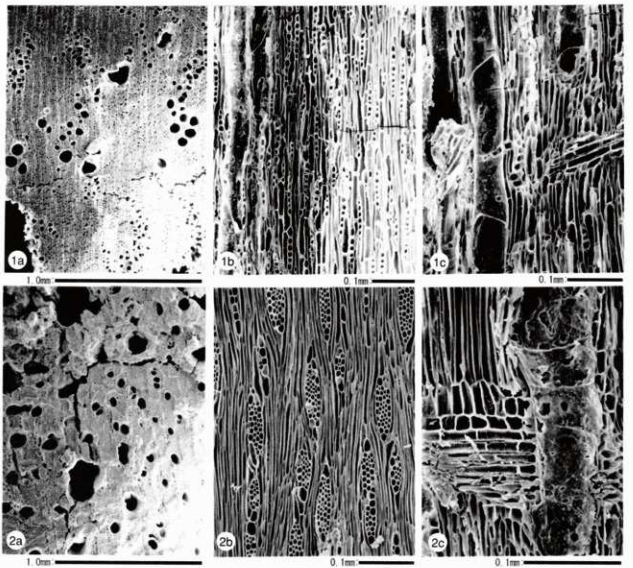
(2)クスノキ科　Lauraceae　図版1　2a-2c(焼土を伴う土坑1号)

小型～中型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合し分布し，年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状，穿孔は単穿孔である。放射組織は異性，1～4細胞幅，上下端に大きく膨らんだ細胞や直立細胞がある。

第21表　山田中西遺跡出土炭化材の樹種同定

地　区	層　位	遺　構	樹　種	年代測定№など備考
B-2区	Ⅲ層	P20	シイノキ属	PLD-4803 小破片複数
B-2区	Ⅲ層	焼土を伴う土坑1号	クスノキ科	PLD-4804 幅約5cm・厚み約2cm・長さ約10cm

クスノキ科は主に暖帯に生育する多くは常緑の高木または低木である。管孔が非常に大型で油細胞も大型で豊富であるクスノキ以外のクスノキ科である。



図版1　山田中西遺跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c:シイノキ属(B-2区Ⅲ層P20、PLD-4803)　2a-2c:クスノキ科(B-2区Ⅲ層土坑1(炉)、PLD-4804)
a:横断面　b:接線断面　c:放射断面

第Ⅶ章　まとめ

今回報告する喜界島通信所整備事業に伴う調査区は，山田中西遺跡の一部でしかなく，遺跡の性格については別の県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査の成果も含めて明らかにしていきたい。従って，今回のまとめは，本調査区で明らかとなった遺構・遺物の概要と問題点に絞って整理する。

1　古代の調査成果

(1) 全体の概要

土師器の甕と須恵器の甕が出土しているが，出土量は少なく，小片が多いため詳細な時期の特定が困難である。また，この時期に該当する遺構は抽出できていない。これは，この時期の遺物のみを出土する良好な遺構に恵まれないことと，古代と中世の遺構埋土の識別が困難であったためである。

(2) 土師器の甕について

総数22点出土している。出土した土師器は全て小破片で摩滅が著しく，調整等の観察は困難であった。しかしながら，口縁部形態と胴部にケズリを施す技法は鹿児島県本土で見つかる土師器の甕に共通しており，製作技法を熟知した者によって作られた可能性が高い。第16図７に関しては口縁部形状が明瞭な「く」字状を呈し，胴部が張る可能性があることから，８世紀代のものであることも考えられる[*1]。８世紀代の遺物は県営畑地帯総合整備事業で調査を行った山田中西遺跡や山田半田遺跡でも須恵器の蓋や土師器の甕が確認されている。第16図８～13については詳細な時期比定は困難であり，現段階では土師器の年代を８世紀中頃～10世紀頃と捉えておく。資料の遺存状況が悪いため制約を受けるが，土師器の細分と時期比定は城久遺跡群の整理を通して行っていきたい。

また，本遺跡においては当該期の奄美諸島の土器型式である兼久式土器が出土していないことも１つの特徴である。最新の研究成果によると（高梨2005），兼久式土器は6世紀後半～11世紀前半代の年代観が与えられている。本町先山遺跡では兼久式土器が出土しており，高梨分類のⅢ期（８世紀後半～９世紀前半）に位置づけられている。島内において出土する遺跡としない遺跡があるが，このような違いがなぜあるのか，また，土師器が島内で生産されたのか，島外からの搬入品であるのか等も今後の検討課題である。

(3) 須恵器の甕について

点数は少なく，胴部片が多数を占め，口縁部片はごく僅かである。この出土状況は城久遺跡群全体に共通し，須恵器の供給を考える上で重要である。出土した須恵器はおそらく９世紀以降のものと考えられ，金峰町荒平窯産の須恵器に類似していることが指摘されている。今後は，胎土分析等を通じて生産地の特定を行うと共に，明確な時期の確定を行う必要がある。

2　中世の調査成果

(1) 遺構

遺構の配置関係

２区～５区では，掘立柱建物跡，焼土を伴う土坑，焼土跡がみられ，土坑墓と土坑（一部墓の可能性有り）は０・１区で検出されている。両者は隣接するしており，集落の中で居住域と墓域が存在することが想定できる。掘立柱建物跡の時期は出土遺物から11世紀後半～12世紀頃と考えられ，土坑墓と同時期の可能性がある。

掘立柱建物跡の主軸は東西方向を基本としているが，片廂の建物（掘立柱建物跡３号）は南北方向の可能性がある。主軸に違いが見られるが，建物の時期については出土遺物から中世の掘立柱建物跡であると思われる。

また，掘立柱建物跡１・２号と掘立柱建物跡３・４号の間には遺構密度が低い地点が存在する。この空白地点を挟んだ建物の配置が時期差であるのか，居住域での生活空間の違いもしくは，集団の単位を意味するものなのかは検討していく必要がある。

土坑墓

土坑墓の大きな特徴は火葬骨が検出されていることと，カムィヤキ・白磁を副葬していることである。

土坑墓1号は72×55cmの楕円形である。土坑墓内には少量の火葬骨とともに，カムィヤキの小壺と白磁椀が副葬されている。また，南西隅の床面に珊瑚礫が１点置かれている。この他に滑石製品が１点出土しているが，これが副葬品であるかは判断できない。工事中発見であるために，上部は削平されている。そのために，火葬骨が直接遺体を焼いたものなのか，骨化した遺骨を焼いたものかは判断できない。また，白磁椀は畑地帯総合整備事業の山田中西，山田半田遺跡の調査事例から伏せられていた可能性がある。土坑墓の時期は白磁椀Ⅷ-２類の存在から12世紀中頃～後半である。

土坑墓2号は215×100cmの長方形を呈し，一般的な土坑墓に類似した形態である。検出した火葬骨は，性別不明だが成人骨とされ，おそらく1体分であることがわかっている*2。さらに，火葬後に全身の焼骨が拾われているが，1体分全身の量には足りない。火葬骨は長方形の土坑墓南端に集められており，その脇にはカムィヤキの小壺が副葬されていた。2号については，形態が一般的な土坑墓に近いこと，火葬骨と副葬品が南端に集められていること，火葬骨の遺存量が少ないことから，一度埋葬した遺体を掘り起こし，二次的に火葬して再び同じ墓坑に埋め戻した可能性がある。

この他に，土坑墓3号でも焼骨片が確認されている。考慮すべきことは，土坑墓1～3号の周辺で見つかっている土坑群の位置づけである。これらの土坑の中には土坑墓1～3号に形態が類似しているものがあり，その一部は副葬品を伴わない土坑墓の可能性がある。これらはA·B－0·1区で検出されており，この周辺では掘立柱建物跡が見られないことから，墓域を形成しているものと考える。

焼土を伴う土坑，焼土跡

焼土を伴う土坑は直径120cmの円形を呈し，床面と側面が赤く均一に焼けている。土坑内には炭化物の層が見られ，炭化木も出土していることから，木炭窯の可能性を指摘しておきたい。このような特徴を持つ遺構としては，隼人町柊木原遺跡の木炭窯があげられる。柊木原遺跡の木炭窯は近世の事例であるものの，形態や焼け方などが本遺跡のものに類似しており*3。本遺跡の焼土を伴う土坑の性格を考える上で重要な調査例である。土坑から遺物は出土していないが，出土木炭の放射性炭素年代はBP1074 ±20年で周辺の遺構・遺物の年代と調和的である。出土木炭の樹種はクスノキ科である。

また，粘土塊として報告した遺物は未調整で焼成も軟質である。さらに，空気孔を思わせる直径1cmの穿孔があることから，木炭窯を被覆した粘土が二次的に被熱したものの可能性もある。

焼土跡2号は鉄滓が出土していることから鍛冶炉である可能性が高い。焼土跡1号は残りが悪く，正確な形態は不明であるが，高温で焼けているために中心部が白色を呈し固くしまっている。以上から1号に関しても鍛冶炉の可能性を考えることができる。焼土跡周辺では椀形鍛冶鉄滓，鞴の羽口が出土している。

(2) 遺物について

白磁

本遺跡において確認された白磁は7点である。出土点数は少ないながらも大宰府分類椀Ⅳ・Ⅴ類が多いことが指摘できる。再度確認になるが，2は椀Ⅷ-2類，5は椀Ⅳ類，20は椀Ⅳ類，21は椀Ⅴ類，22も椀Ⅴ類に相当すると考えられ，11世紀後半～12世紀後半に位置づけられる資料群である。

カムィヤキ

カムィヤキは椀・壺・甕の器種構成である。最近の研究成果（新里2003）によると，土坑墓1号出土品は新里編年Ⅱ～Ⅲ式，土坑墓2号はⅣ式，包含層出土の25の椀はⅠ式，その他の壺・甕は小破片ではあるが，Ⅰ～Ⅳ式段階に該当する*4。これらの年代は11世紀末～13世紀前半代に捉えられており，白磁の年代観と相違しない。33は胎土に白色砂粒を含み，カムィヤキの特徴を有しているが，内外面を丁寧にナデ消していることなどから，カムィヤキ以外の陶器である可能性が高い。今後検討していくことが必要である。

また，土坑墓の資料は消費地における，カムィヤキの使用方法及び使用期間を知る上で重要である。

滑石製品

滑石製石鍋の編年案や型式分類については森田勉氏や木戸雅寿氏，山本信夫・山村信榮氏らの研究成果がある。山田中西遺跡から出土している滑石石鍋は縦耳のものがほとんどで，鍔状のものは見られない。木戸分類では Ⅱ類に当たり，11世紀頃の年代が当てはめられる（木戸1995）。また，山本・山村編年では中世Ⅰ期（11世紀後半～12世紀前半）に位置づけられている（山本・山村1997）。

滑石片に対して何らかの加工痕が認められるのは79点中42点であり，穿孔痕があるものは17点である。近隣の遺跡で滑石片が多く出土した遺跡として小湊フワガネク遺跡群があげられる。池田榮史氏はフワガネク遺跡群出土滑石に対して考察を加え，滑石片が破片の状況で持ち込まれた可能性を指摘している（池田2003）。本遺跡においても3点の資料が穿孔部で接合している。割取りをするために穿孔を施した可能性も考えられ，比較的大きな破片があった可能性がある。

製作の段階を大きく3段階に分けて考えた。

1　擦り切り技法によってパーツを割り取ったもの（加工品の素材）

2　割取った滑石片に研磨を施しているもの
3　製品として加工されているもの

1は52～54が，2は55～57が，3は59～65がそれに相当する。スタンプ状製品（62・63）に関しては宮崎県八児遺跡において補修具としての使用方法が見つかっている。今後検討していくことが必要である。

石器

石器は台石，磨石，凹石，砥石，金床石，軽石製品等の礫石器が主体である。古代・中世の土器と供に出土するため，時代は古代から中世と考えている。これらの石器の多くは柱穴内から出土しており，本来の目的で使用した後，根石として柱を固定するために詰めた可能性がある。

注目される石器としては金床石がある。表面が強く焼けており，表面に敲打痕や鉄分が付着している。また，砥面を形成していることから，砥石としての機能を併せ持っている。

石材は砂岩，安山岩を使用している。本島は石灰岩で構成されているため，島外から持ち込んだか，砂丘上の縄文遺跡で採取した可能性が考えられる。

鉄製品

出土した刀子は欠損した茎が鍛接され，重なった状態であり，欠損部を修理している途中の資料であると考えられる。また，非常に薄いことも特徴の一つである。形態は関が発達せず，身幅が広く刃部が緩やかにカーブを描く。鹿児島県本土から出土する刀子にはないタイプで，沖縄県で出土している刀子に近いものと考えられる[*5]。沖縄県の類例として，今帰仁城跡，勝連城跡がある。

まとめ

1　8世紀代～12世紀頃の大規模な集落跡である。
2　本調査区の掘立柱建物跡，土坑墓，土坑，焼土跡の時期は12世紀頃である。墓域と居住区は隣接して存在することが想定できる。
3　12世紀以降，火葬骨にカムィヤキ，白磁椀を副葬する特徴的な墓がある。鹿児島県内で今のところ類例はない。
4　副葬品をもつ土坑墓ともたない土坑墓がある。
5　古代において煮炊き具，貯蔵具は九州島と同じものを使用している。しかし，供膳具が欠落しており，これについては在地で使用された伝統的な容器の存在が考えられる。また，中世の段階になっても土器の食膳具は現れない。
6　奄美諸島で古墳時代～古代に位置づけられている兼久式土器は出土していない。
7　中世においては滑石製石鍋片が大量に出土している。その出土量は南西諸島において卓越した量である。

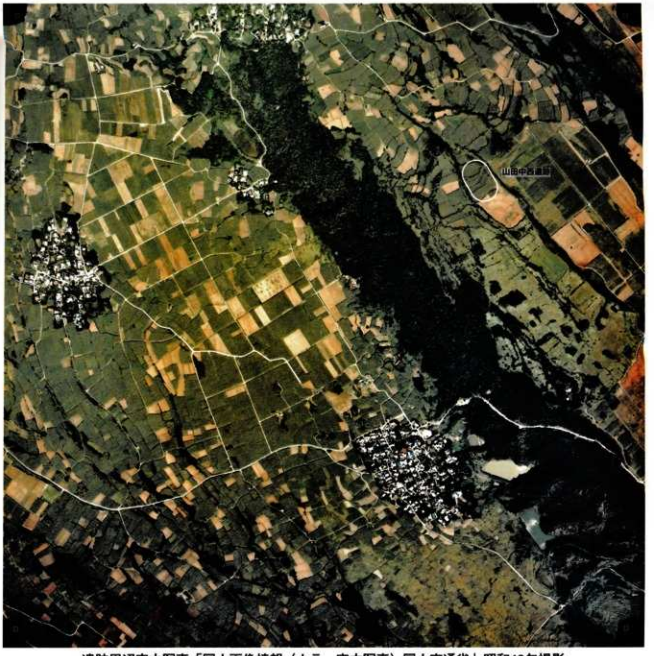
註

1　土師器・須恵器の分類・年代観については，鹿児島県立埋蔵文化財センター中村和美氏の御教授による
2　本書竹中正巳氏報告による
3　霧島市教育委員会重久淳一氏の御教授による
4　伊仙町教育委員会新里亮人氏の御教授による
5　愛媛大学村上恭通氏御教授による

〈参考・引用文献〉

池田榮史2003「第８章考察　第１節穿孔を有する滑石製石鍋片について」『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認調査報告書』
池畑耕一　1998　「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『渡辺誠先生還暦記念論集　列島の考古学』
喜界町教育委員会　1987『先山遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
木戸雅博1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ
柊木原遺跡調査会　2000　『柊木原遺跡』
新里亮人2003「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』第49巻第４号（通巻196号）
高梨修　2005「第６章考察と分析　第１節　小湊フワガネク遺跡群第一次・第二次調査出土土器の分類と編年」『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』
太宰府市教育委員会　2000「大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－」『太宰府の文化財』第49集
中村和美　1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号
山本信夫・山村信榮　1997「中世食器の地域性－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』71

図　　版

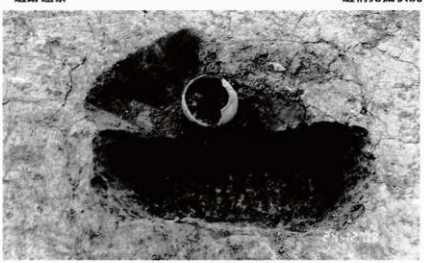


遺跡周辺空中写真「国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省」昭和49年撮影

図版2

遺跡遠景

遺構完掘状況



土坑墓1号副葬品出土状況

土坑墓1号完掘状況

土坑墓2号副葬品出土状況1

土坑墓2号副葬品出土状況2

土坑墓2号副葬品出土状況3

土坑墓2号完掘状況

図版4

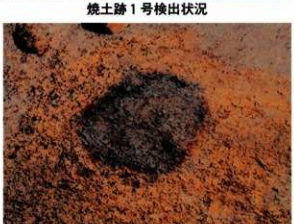
焼土を伴う土坑1号検出状況

焼土を伴う土坑1号炭化材出土状況

焼土を伴う土坑2号半掘状況

焼土跡1号検出状況

焼土跡1号断面



焼土跡2号検出状況

焼土跡2号半掘状況

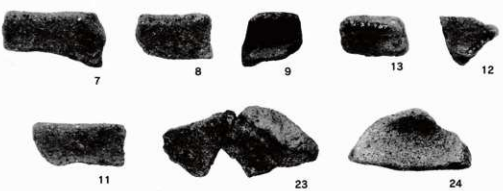
焼土跡2号完掘状況

土坑墓1号出土カムィヤキ

土坑墓2号出土カムィヤキ

土坑墓1号出土白磁

土坑墓2号出土滑石



古代・中世の遺物（土師器・滑石混入土器）

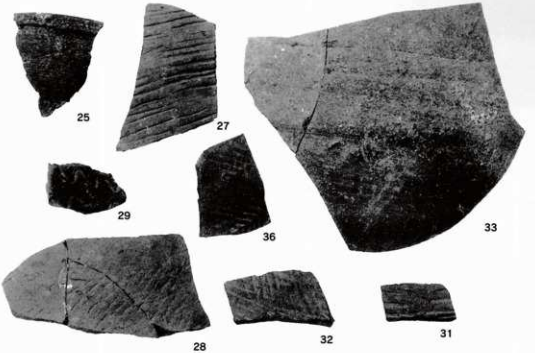
図版6

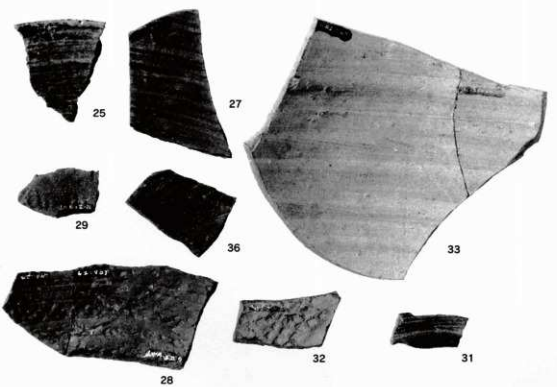
古代の須恵器

中世の白磁

刀子・鞘の羽口（表）

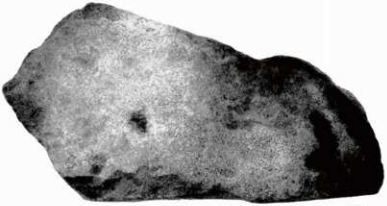
刀子・鞘の羽口（裏）





カムィヤキ（上：表，下：裏）

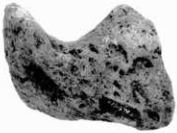
滑石（上：石鍋片，下：二次加工品）


80

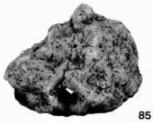
74

79

78


81

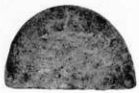
86


85

76

70

73


75

石器・粘土塊

あとがき

初めての報告書がようやく完成しようとしている。

思えば平成１３年度に，当時は姶良郡姶良町にあった鹿児島県立埋蔵文化財センターでの６か月間の長期研修を受講してから埋蔵文化財との付き合いが始まったのだが，ここまでこの世界と濃い結びつきになろうとは想像だにしなかった。あれから５年の月日が流れてはいるものの，私自身の発掘調査担当者としての技量はなかなかあがらず，調査現場での悪戦苦闘が続いている中，この報告書作成が追い打ちをかけてきた。

私一人であったらおそらくこのあとがきを書くところまで至っていなかったと思うが，今年度から本町の埋蔵文化財発掘調査員として共に汗を流している野崎氏，また夜遅くまで親身になって指導をして下さった県立埋蔵文化財センターの川口氏のおかげで刊行までたどり着けた。本報告書が読むに堪えるものになったとすれば先の両氏や県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センターなどの各関係機関の方々のご協力・ご指導の賜物にほかならない。また，快く発掘調査にご協力いただいた地域住民の皆様，そして，役者不足の私と共に発掘調査や整理作業にあたった作業員の皆様に記して感謝の意を表します。

（澄田）

井ノ上秀文・池田榮史・川口雅之・竹中正巳・村上恭通・地域住民

発掘調査作業員（平成１６年度）

稲崎明和・井上多美子・上間洋子・大島順子・勝田志津夫・木村タミエ
久保元子・坂元小百合・玉利トヨ子・徳勝夫・篤田善男・成田喜代美・元基治
開えり子・吉野義昭

整理作業員（平成１７年度）

坂元ちえみ・長島順子・成田喜代美・秀島博己（五十音順・敬称略）

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

喜界島通信所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

城久遺跡群

山田中西遺跡Ⅰ

発　行　日　2006年3月31日
編集・発行　喜界町教育委員会
〒891-6292　鹿児島県大島郡喜界町湾1746
印　　刷　渕上印刷株式会社
〒892-0845　鹿児島市樋之口町6-6